33
470

神秘論

沈默
靈魂の覺醒
先定論
神秘的道德論
婦人論善
不見之善

著 メイテルリンク
譯 西村醉夢

緒言

此の書は、アルフレッド、サトロ氏によりて英譯せられたる MAURICE MAETERLINCK 氏の "The Treasure of the Humble" 中より "Silence." "The Awakening of the soul." "The Pre-destined." "Mystic Morality." "On Women." "The Invisible Goodness." の六篇を譯したるものなり。戯曲家としてのメイテルリンク氏は、やゝ廣く世に知られ、その戯曲はた譯出せられたるもの多けれど、哲學者としての彼、美學者としての彼を窺ひ得可き本書は、尚ほ未だ汎ねく讀まれざるものゝの如し。予の淺學なる、素より飜譯の能あるものにあらざれど、讀みもてゆく中、不思議なる神秘の力に打たれて、恍惚たる折節譯し置きたるものありければ、そを輯めて一卷となし『神秘論』と題して版に上すことゝなしぬ。概ね逐語譯を試み、敢て日本化せざりしは、原文の神韻を保たんとてなり。されど、これが爲め、却りて分らぬやうになりし節多かるべく、はた註れる節も少なからざる可し。大方の示教を賜はらば幸にこそ。

明治三十九年二月

譯者

メイテルリンク 神秘論

目錄

沈默……
霊魂の覺醒……
先定論……
神秘的道德……
婦人論……
不見之善……

メイテルリンク著
西村醉夢譯

沈默

昔はカアライル叫んで曰へらく、「沈默よ、神秘よ、(今はたとひ祭壇濫造の時代なりとも)尙ほ虔んで彼れ等の爲めに祭壇を建設し、以て一般世人の崇拜に應ふる所なからざる可からず。それ沈默は凡ての大人物が、由つて以て彼等自身を標榜し、遂に自己が將來永く支配せざる可からざる人生の陽に、自己を顯彰し、形成し、且つ威嚴あら

しむる要素なり。ひとり沈默王ウィリアムのみならず、わが知れる達人及び、非外交的にして權謀を用ゐざる多數の人は、自ら抑壓して、その事業及び企圖に關して公言することを愼めり。汝等若し困難なる狀態に陷らば、唯だ終日その口を箴せよ、然らば則はち翌日に至りて、その目的と職分とは自ら闡明せられなん。贅辯の冗々として費やさるゝ時は則ち、汝等の中の沈默家が、塵芥を一掃し去るの時なり。能辯とは、かの佛人が定義を下したらん如く、思想隱蔽の技術なり、隱蔽せんと欲するも、一の隱蔽すべきものあらざるまでに、思想を中絶し、杜塞するの技術なり。能辯はまた偉大なるものなり、然れども絶大なるものにあらず。瑞西の記錄にも云へる如く、能辯は以て白銀に比すべく、沈默は以て黃金に較ぶべし。さはれ寧ろ予が說明して、能辯は一時的のものなれども、沈默は永久的のものなりと云ふに若かず。

「蜜蜂は暗所と雖ども働き、思想は沈默の中にも存す、天下豈に隱德なるものあつて、人の知らざる所に慈善を施こすことなからざらんや。」

人の思想は言語の媒介によりて、常に甲より乙に傳へらるゝものなり、と考ふるは誤謬なり。唇や、舌は、素よりよく靈感を表現し得可し、一の符牒、一の番號すらも、尙ほ能くメムリングの繪畫を表現することを得可ければなり。されども若し吾人にして、相互に何事をか云はざる可からずとせば、その瞬間よりして、吾人は强いて平和を維持せよと迫られたるものなり。恁る時に蒞んで、吾人若し有力なる沈默の命令を奉ずることなくんば、そは假令眼には見えざるべきも、爲めに吾人は永久の損耗を招きて、人智一切の寶樹をして好菓を結ぶこと能はざるに至らしめん。何となれば、吾人は他の意志に聽いて、之を自己の中に存在せしむるの機會を避くべきものなればなり。されども恁くの如きは一例のみ、世には多くの之に類する機會ありて、自ら、再び存在するや否やも計り知らざるものあり。……

吾人は只だ醉生夢死せる時にのみ語る、吾人の語る時は即はち實在遠く去りて、自己が他より認識せられざる場合なり。吾人にして語らん乎、何者と

も知らず吾人に囁いて、天門の鎖されたることを告げん。かくて吾人が沈默を懷かしみ、又た頗ぶる之を愛吝するの時來る。その始めて來るや、危險にも沈默を守らんと欲せざることすらあり。そも人間の中には、一種の超人間的眞理の本能ありて、吾人が或は知らざらんと欲し、或は愛せんと欲せざる者と共に、吾人に向つて沈默の危險なることを警告す。それ言語は、人々間に使用せらるゝに過ぎず、沈默をしてその活動の瞬間を保持せしむること能はず。加之沈默は、自己を湮滅すること能はざるものなり。眞の人生、即ち種族を委棄しての人生こそは、只だひとり、眞に沈默を立し得可し。願はくば汝が再び信賴せざる可からざる沈默の裡に住して、深く思索し、之に依つて之を觀ずるに至らしめよ。若し一瞬間汝の頭上に降り、また天使住する所の深淵に降らんことを許せしものあらば、そは、汝が親愛して呼び返さまく欲する造物者によりて、語られたる言にはあらず、將た又た彼によりて造られたる姿にもあらずして、そは只だ、汝より出でゝ汝に歸る所の沈默てふものなる可し。蓋し、沈默はその性質上、汝等の愛情及び、汝等の靈魂の性質を現はすに足るものなればなり。

如上の解說は、これたゞ能動的沈默についてのみ。こゝにまた所動的沈默なるものあり、こは眠の影、死の影、非生存の影なり。所動的沈默は、一種の昏睡病にして、その懵乎として睡れる間は、殆んど能辯にひとしき害惡を流す。然れども一度唐突なる事件の湧起するや、その兄弟たる大能動的沈默は、忽焉として玉座の上にその身を起さん。注意せよ、二個の靈魂にして互に引合はんか、防禁柵は寸斷せられ、門は開かれ、日常生活は、最と眞面目にして何等の障碍もあらぬ狀態に變ぜられん。かゝる生涯に入れば、笑はその俤を現はさず、屈從はその姿をとゞめず、何等の忘らる可きものあらざる可し。……

深き沈默の底に佇むことに依りて、吾人々間は、よく此の物凄き勢力と、恐ろしき顯現とを知了することを得べし。吾人は若し必要とあらば、自己の沈默、即ち孤獨の沈默を守ることを得可し。然れども多數の沈默——集まり

たる沈默――就中群集の沈默――は超自然的の苦痛にして、その不明なる度合は、いたく吾人の大靈魂をして恐怖せしむ。吾人は沈默のあらざる處を求めて、その盛年時代を過ごす。二三の人相會するや否や、彼等は必らず、見えざる敵を掃蕩せんと欲す。嗚呼盛なる哉、平凡なる友誼を結べる多數の人が、常に友誼の唯一の根柢は、沈默を嫌忌する點に横はれりと云ふことや。然るに若し衆人稠座の中に在りて、恣まに之を破つて沈默を守らんとする者あらば、不安の色は人々の面に泛び、その休む間もなき双眼は、見えざる物の神秘なる方向に向つて彷徨せん。かくて各人遽たゞしく其の場を去りて、口喧ましき饒舌者流の前に赴かむ。而して之に均しき災害の、再び彼等の頭上に落下するまでは、心の中に恐を抱き、若しくば、己れ等の中には裏切して、敵の爲めに門を開く者あらざるかを疑ひて、彼等は互に人を避けんとするなり。……

沈默が實際に了知せられ、自由に任さるゝことは、吾人一生涯の中に於いても、二三度より多くはあらざる可し。

げに此の神怪不思議なる客人の歡迎せらるゝは、頗ぶる壯嚴なる場合に限れり。然れどもその來降せし時に際しても、價値ある歡迎をなすものはあらず。蓋し、如何に味氣なき生涯を送れるものにても、尙ほ吾は如何にして働くべき乎を知り、また何事が神によりて知られたるかをすら知るの機會あればなり。願はくば日々心中に恐れ慄くことなく、只だ汝の最初の沈默に會せんと努むべし。恐ろしき時辰の音は響きぬ、沈默は汝の靈魂の前に行けり、汝は語るべうもあらぬ人生の谷より、恐と美との心の海の深底より、上りつゝある沈默を見たり。しかも汝は飛ばざりき……沈默は歸宅の際に在り、出發の出口に在り、大歡喜の半ばに在り、臨終の床の枕頭に在り、恐るべき不運の來りし時に在り。思考せよ汝、神秘の寶玉燦爛として輝き、睡れるが如き眞理の目を醒まして生活狀態に入りし時、大に思考せよ。而して予に語るに、左の二者中の一を以てせよ、曰はく沈默は善良且つ必要にてはあらざりし乎、汝が甚だしく厭へる敵を鍾愛するは、果して眞の神意にてはあらざりし乎と。

不幸の沈默の接吻は――就中沈默が吾人を鍾愛する時に起る――決して忘らるべきものにあらざるなり。かるが故に、最も多く不幸の沈默の接吻を受くる者は、他の沈默の接吻を受くる者よりも價値あり。彼れ等は能く知れり、日常生活の脆き甲殼が、據つて以て憩ふ所の水こそは、無聲と無底との存在するところなれと。彼れ等は神に接近しぬ、その光明を望んで登りし階段は、決して賊はるべきものにあらず。蓋し靈魂は登陞することを得ざるべしと雖ども、而かも亦決して沈下すべきものに非らざればなり。……カアライル――彼は最もよく吾人を支持する生命の帝國を了解したる人なりき……又た曰はく「沈默、沈默の大帝國は、星辰よりも高く、死の領よりも深し……沈默と大沈默家、彼れ等は其の領内到る處に撒布せらる、彼等は靜かに思考し、靜かに活動す、如何なる朝も、新聞紙にして彼れ等に關する報導を載せざるはなし。彼れ等は地球の鹽なり。少くとも二三の沈默家を有せざる國家は必ず廢滅せん。かくの如き國家は根なき森の如し、枝葉衰萎し、やがては枯槁して森たらざるに至らん。」

さはれ眞の沈默は、カアライルの說きし物質的沈默よりも、更に大きく更に困難なるものなり。眞の沈默は吾人の周圍に遍在す、然れども、そは人間を支配する神の一種にはあらず。沈默は吾人の生涯を繞れる潛流の一種なり、そは常に吾人の中の或る者をして、戰慄せる手指を以て地獄の戶を敲かしむ、しかも此の戶や、常に此の注意すべき沈默の力によりて開かるゝものとす。

沈默とは際涯の知られざるものなり。沈默の前には萬人平等なり、死、歎、愛の中に存在する沈默は、王侯のも、奴隸のも、同一の形を以て現はれ、その窺ふべからざる外套の下に、その同一なる財寶を隱す。何となれば、かゝる沈默は、吾人の靈魂、即はち神聖にして侵すべからざる靈魂の根原的沈默にして、その尊嚴なる、決して冒すべきものに非ざればなり。而して人間の天稟は、たとひ世界在來の習慣に從はざる可からずとするも、一種の血族的衝動は、彼れ等を驅りて、その鍾愛する所、その恐るゝ所、その悲む所には無聲ならしむることあらん。血族的衝

動は人を驅使せんと欲す。若し僞ることなくして誠意を明言せんには、不言の語は必ずや要求せらるべし。然れども世紀は吾人を俟たず、同一の瞬間を以て來り追ふこと、宛から一個の搖藍の數兒を容るゝに異ならず。これ口舌が世界の全滅せざる前に、先づ語ることを學ばざるに至ることを、說明せるものに非らずして何ぞや。……

口唇の覺醒するや、靈魂も亦た覺醒して、その勞苦を現じ來るものとす。蓋し沈默は、驚愕と、危險と、幸福とを以て充たされたる一元素にして、吾人の靈魂は、その裡に、自己の自由なる領分を占むるものなればなり。若し汝の希望にして、他人の爲に一身を犧牲に供せんとならば、願はくば沈默なれ。又若し汝にして他人と共に沈默を恐れんには——その恐れは、非凡を憧憬する戀情の矜誇にして、その矜誇は不確實、不充分なるに非ざるよりは——他人を去つて飛翔せよ、汝の靈魂は、如何によく遙かに飛び得べきかを知れり。世には一種の人物あり、その人物の存在するや、英雄中の偉大なるものは、敢て沈默を守らざらんとす。而して靈魂すらも、自己の神秘の他物に發見せられんことを恐れて、戰慄をとゞめざることあり。或る者は全く沈默を守らずして、自己を圍繞せる沈默を殺滅し、或る者は何等の觀念も持たずして、蠢々として生涯を送る。これ等の者は、顯現の靈境、即ち確實にして誠信なる光明境を通過することを許されず。吾人は如何なる種類の人が、沈默を守り得ざるかを考ふること能はず。沈默は靈魂の無形なるが如く、吾人には見るべからざるものなり。予の最も親しくせる友は、予に書を贈りて曰はく「吾等は今尙ほ互に知らざるなり、吾等は尙ほ未だ敢て共に沈默を守らんとせず、」と。これ眞理なり。げに吾等は、天の試問に逢ひて顫ひ上る程、互ひに親しみ互に愛くしみてありたりき。而かも沈默——最も深き眞理の天使、即はち知らざる事を吾れ等に報導する使者——が吾れ等の頭上に落ち來る毎に、吾れ等の靈魂が跪まづいて哀を請へる事を感得せし時毎に、吾人は無罪の數時間、無智の數時間、小兒の數時間を要求したりき。……

かくの如くにして、求むる時は來ら

ざる可からず。沈默は愛の日光なり、天の日光の地の菓實を熟せしむる如く、愛の日光は靈魂の菓實を熟せしむ。然れども人は往々にして之を恐る。蓋し誰一人として己れの頭上に落ちかゝる沈默の性質の、如何なるものなるやを語り得るものあらざればなり。有らゆる言語は、皆な血族たらんとも、沈默は悉くその種屬を異にせり。されども稀には除外例あり、その場合に於ける沈默は、一種の完全なる運命にして、兩個の靈魂に降りたる最初の沈默の性質によりて支配せらる。これ等は常によく紛糾す。吾人は何處に、沈默の貯藏所が造られて、夫の思想の貯藏所の上に横はれる乎を知らず。將た又、その訝かしき釀造の結果として、現はるる物の味の苦きか甘きかを知らざるなり。兩個の靈魂は共に尊敬すべく、其の力も亦た二つながら均し。しかも尙ほ自己の嫌忌せる沈默を活躍せしめ、且つ自ら、暗黑の裡に、同儕に對して殘忍なる戰を宣すべき準備をなす。これと同時に、罪人の靈魂が前進して、神聖なる沈默の裡に天女の靈魂と交通するが如きこと有り。かゝる決果は到

底豫言せらるべきに非らず。かくの如きは、凡て物言はざる天上を通過す。かるが故に戀人の柔情は屢々、最後まで延ばされ、吾人々間の心底が顯現して、崇嚴なる形を作すに到るまで俟つこと有るべし。……

蓋し彼れ等はよく知悉せり——眞の愛なる愛情は、人間の中年時代をして、その幼稚時代に逆戻りせしむと——彼れ等は又たよく知悉せり、前進したる者は、總て是れ門外に嬉戲せる兒童の如きのみ、今や四面の側壁は落ち盡くして、人は咸な暴露せらるゝの時なりと。彼れ等の沈默は、神が彼れ等の中に存在するが如くに存在す。若し此の最初の沈默中に、調和なるもの有らずんば、その靈魂中には、愛なるものは斷じて有らじ、これ沈默は變化あるべき物に非らざればなり。沈默は兩個の靈魂間を昇降す、然れども、その本質に至つては、釐毫も變動することなく、戀人の死に逮るまで、その特有の形式や、姿態や、勢力やを支持して、最初の狀態を保つものとす。

吾人が人生の過程を進むに從ひて、沈默は吾人をして、或は好奇的豫想と

一致せざるものに非ざることを理解せしめん。吾人は言語を用ゐず、また強いて吾が心をして、其上に住せしめんとするものに非らず。然れども吾人の頭髄以外に、言語の存在せることは、吾人の絶對に論證せざる可からざる所なり。それ愚鈍なる人は、その最初の邂逅に於いて微笑を含むこと、宛から共同して其の同胞の運命を荷へるものの如くなるべし。而して此の點に於いて、深遠なる事を語る者——恐らく其の人は、他の人々よりも深遠なる事を語るものならん——すらも、言語は決して兩者の間に存する特有の關係を表現する能はざることを實現するに過ぎず。予は假令一瞬間を以て、汝に對して一切事物——愛や、死や、運命や——に關するとを語り得べしとするもそは予の實地に觸れたる愛や、死や、運命やにはあらざるべし。吾人はまた如何に努力せんとも、未だ曾て語られしことなく、また語らんとの考も浮ばざりし眞理の、吾人の間に殘されたるを見るならん。此の眞理は、吾人と共に存在し來り、或は存在せんとし、將た また之に由りて、心を傾注せしめられ

しと雖ども、畢竟一の無聲に過ぎざるなり。蓋しこの眞理なるものは、死、運命、戀愛に關する吾人々間の眞理にして、そは沈默の中に存在し、考ふることに依りて、僅かにこれを觀るを得可し。只だ一つの沈默を除きては、世に重要と呼ばるべきものなし。お伽噺中の小兒は曰はく、「お姉さん、貴方々は皆な手々(てんで)に不思議な考を持つて居らッしやるでせう——どうぞ私に聞かして下さいな、」と。吾人も亦た人々が知らんと欲すれども、不思議なる思想の彼方に隱れて、知り得ざる所の或る物(サムシング)を有す——これこそは、吾等の神秘なる沈默てふものなれ。然れども、有らゆる疑問は所詮は要なし。吾人の精靈の覺醒したる時、その感激は能く吾人をして、神秘中に存在する第二の生涯に入らしむ。若し吾人にして隱されたるものゝ何物なるかを知らんと欲せば、自から努めて沈默を修養せざるべからず。蓋し夫の鮮麗なる永久の花、即ち神秘の花の如きも、自己に據れる精靈と共同して、その色彩と形態とを變化することに努むればなり。金銀が淨水中に秤量せられて、その眞價を知らる

る如く、靈魂は沈默中に秤量せられて、その眞價を認められざるべからず。かの吾人をして墮落せしむる言語は、己を包擁せる沈默と離れては、何等の意義あるものにあらざるなり。假令吾人にして或る人に對し――千百の人に語るが如く――予は彼を愛すと語らんとも、予の言は其の人に對して、何等の傳達をもなさゞるべし。然れども沈默は追隨し來たる。若し予にして眞に彼を愛せば、心の底に横はれる愛の根は發見せられて、次第次第に、沈默の中に宿れる確信てふものを生ずるに至らん。此の沈默と此の確信とは、人生の徑路に於いて再び逢はるべきものに非るなり。……

愛の香味を選定するもの、是れ即はち沈默にてはあらざる乎。若し沈默を芟除せられなば、愛はその永劫の精粹と香味とを失ふべし。人誰れか靈魂を再結せん爲めに、唇を離れたる沈默の瞬間を悟了せざるものあらんや。沈默は常に吾人の求めざる可からざるものなり。世には愛の沈默ほど順良なる沈默はあらず、而してこれ實に、吾人が自己の爲めに要め得る唯一の物たり。

この他の大沈默、即はち死、歎、運命の沈默の如きは、吾人に屬せるものに非らず。これ等の沈默は、行爲の徑路に從ひ、時を以て來りて吾人に對す。故に人若し之に遭遇することなくとも、敢て自ら咎責するに足らざるなり。然れども、吾人はよく、自ら進んで愛の沈默に遭遇することを得。愛の沈默は吾人の家門に立ちて、日夜吾人を待ちつゝあり。此の沈默は、兄弟たる他の沈默と均しく、極めて美くしきものなり。稀に泣く人々にして、屢々悲歎に遭遇せし人々の如く、具さに靈魂の生命を知り得ることあるは、是れ全く沈默の恩賜なり、吾人は沈默に謝せざる可からず。かるが故に、吾人の中、深く人を愛するが如き者は、他人に知られざる多くの神秘を知了す可し、これ即はち沈默を理解せるものなり。何となれば、千百萬の事物は悉く、眞の友誼及び愛戀の唇の上、靜けき沈默の中に搖動し、友誼や、愛戀やは、友誼や戀愛を知了せざる者の、唇の沈默の中に、發見せらる可きものにあらざればなり。……

靈魂の覺醒

恐らく或る時は來るならん――時來れば則はち多くの物は、その到來を報ぜん――その時に於いて、吾人の靈魂は、感覺の媒介なくして、各自互に知り合ふならん。此の世には、靈魂が永劫無限の絶對界に一致せざる日とては一日もあらじ。靈魂は吾人の肉體に酷肖す。而して今日に在りては、そが吾人の一切行爲の大部分を占むること、二三世紀以前よりも著るし。吾人は今恐らく、精神的時期の上に立てるならん。その時期に對する比例數は、之を歴史中に發見することを得可し。蓋し人の世には記錄せられたる時代あり、その時代には、靈魂は不可知の定律に服從して、人道の表面に現はれしものの如く、且つ之に由つて、自己の存在と、自己の力量とを、明確に證明したりき。而して此の存在と、力量とは、豫定せられざる多趣多樣の方法に於いて靈魂自身を現はしぬ。かゝる瞬間に在つては、靈魂は恰かも人道の如く、自己を壓する物の下より、その頭を擡げんとして苦悶するものゝ如し。精神的感化は、かの慰撫以外なり。峻嚴にして恐るべき自然律は、到る處に遍在す。世には一種の人あり、この人々は最も彼等自身に近く、又最も彼等の兄弟に近きものなり。彼等の眼の眺めと、胸の愛との中には、深き正義と、優しき友情とを含めり。彼等の婦人、小兒、動物、植物――否一切事物――に關する解釋は、益々憐れみ深くなり、益々深くなりまさるなり。かゝる人々が、吾人に殘しゆきし彫像や、繪畫や、書物やは、恐らく完全なるものにはあらざらん、然かも、その中には神秘の力宿り、記すべからざる慈悲宿り、その最も價なきものすらも、尙且つ永劫不變にして、觀る人の情を動かさゞるはなからん。神怪なる同胞の情と愛とは、かゝる人々の眼中より照射せられざる可からず。吾人の說明する能はざる生命の徽號は、何れの處にもあり、日常生活の側に搖動す。

吾人の古代エヂプトに關して有するが如き智識は、吾人をして、國家が恁かる精神的時期を通過せしことを信ぜしむ。印度歴史中の太古に於いては、

霊魂は人生の表面を掠めて導かれ、又實にそが未だ曾て觸れざりし一點にまで導かれざるを得ざりき、而して今日に至るまで、諸種の不思議なる現象は、そが殆んど眼前に存在せるが如く、紀念物その他もろ〳〵の斷片零碎によりて、その存在せしことを明證せらる。又たこれに類する多くの瞬間あり、この時に於いて、精神的要素は、人道の底深く沈みて苦悶すること、宛から、溺れたる人がその生命を保たんとして、大河の水中に藻掻くにも似たるべし。願はくば波斯、一例せばアレキサンドリアに就いて考へよ、また願はくば中世紀の神秘なる兩世紀に就いて考へよ。

他の方面より觀察すれば、或る世紀に於いては、霊魂の現はされざることありしが、純智と、純美とは、常に儼然として君臨したり。そは希臘、羅馬とは異なり、また佛蘭西の十七、八世紀とも異なれり。(さばれ後者に關しては、吾人は只だその表面に就いて說述し得るのみ、その深底には多くの神秘こそ隱されたれ——吾人は、クラウド、ド、セイント、マルチン、カグリオストロ——彼は餘りきらびやかに一生を送れり——パスカリ、及び其の他多數の人を記憶せざる可からず。)或る物は要求せらる、然れども吾人は、その何物なるやを知らず、防禁柵は神秘の通路を横ぎつて設けられたり、美の雙眼は鎖されたり。言語によりて之を傳達せんとし、若しくは希臘劇曲を包擁せる滅亡(フェーダリチー)と永刼(ヂビニチー)の大氣は、何故に吾人には、眞の霊魂の大氣とは見えざる乎を說明せんとするは、殆んど失望に近き企圖なり。かの無比無儔なる悲劇の地平線上にたゆたへる神秘は、これ實に莊嚴にして永刼なるものなり。されど吾人が、あまり大きくもあらず、あまり美くしくもあらぬ他の作物中に發見する神秘の如きは、これ未だ慈悲深く、同情深きものにはあらず、況んや深玄なる行動をして敏活ならしむることをや。降つて吾人に近き時代を觀察せんか——ラシィヌは實に婦人の心情を寫す點に於いて、誤謬少なき詩人なりしならんも、誰れかよく、彼が婦人の霊魂に向つて、一階を上りしのみなるを主張し得るものぞ。汝は、アンドロチエ、ブリタニカの霊魂について、予に何事を語り得るか。ラシィヌの描きし

性格は、彼が由つて以てそを現はせし言語以外に、何等の性格を知らしむることとなし。又その言語には、海波を止むる突堤を貫ぬかん程のものはあらざりき。彼れの描きし男子および婦人は、これたゞ、恐らくは、今や已に天體中を循環せざる行星の表面にあるもののみ。若し作中の人物にして沈默を守りたらんには、その存在は認められざりしならん。作中の人物はまた見えざる原則を有せず。しかも人は殆んど信じ得可し、或る特立せる物ありて、彼れ等の靈魂及び肉體の間を匍匐し、また生命の間を匍匐したり、而してその所謂生命は、凡ての創造物中に根蔕を有し、且つ暫しの間、感情や、悲歎や、希望に抵抗して苦悶するものなりと。事實上、世には靈魂が活動せずして横はり、何等の妨げもなく、安々と睡れる世紀あり。

されども今日に在りては、靈魂は明らかに大車輪の働をなしつゝあり。靈魂の顯現は何れの處にもあり、その顯現するや、不思議にも眞面目にして、壓力强く、且つ頗ぶる高貴なり。靈魂は常に毅然たる決斷を以て、戰鬪の準

備をなさゞる可からず。然れども、誰一人、その結果に屬する終局に關して、成敗を豫言し得るものはあらざるなり。靈魂は恐らくは今日に到るまで、抵抗すべからざる各種の勢力を、その職分中に投ぜざりしならん。靈魂は宛から障壁の如く自己を圍繞す。而かも人は知らざるなり、靈魂はその死の脈搏中に戰慄するか、或は新生命によりて皷舞せらるるかを。予は玄妙なる勢力に關し、何處にも在る徽號に關して、何事をも云はんと欲せざるなり――磁力、(Magnetism.) 心交力(Telepathy.) 浮遊物(Levitation.) 燦爛たる光明界の確に有在せると(The unsuspected properties of radiating matter.) 及び純正科學の牖戸を敲きつゝある他の無數の現象に關して、何事をも云はんと欲せざるなり。

かゝる物は總ての人間に知られ、容易に確定せらるゝことを得可し。實際かかる物は、語るに足らざる一些事にして、進歩せんとして當然起る所の大爭亂に隨ふものなり。然るに靈魂は、睡眠の奴隷となれる夢中の人の如し、夢中の人はその片腕を動かし、或は瞼を擧げん爲めに全力を注いで苦鬪するも

のなり。

此處にまた別天地あり、その別天地における靈魂の行動は、群集の注意するもの少なきにも拘はらず、一人の目を注ぐものなきにも拘はらす、頗ぶる有力なり。靈魂の無上の絶叫は、恰かも自己を封鎖する迷妄の密雲を破らんとするものゝ如く見えざるか。外國の畫工によりて揮毫せられたる繪畫が見えざるものゝ神聖と、尊嚴とを現はさざるは、恰から、靈魂が未だ嘗て現はされざりしに似たらずや。過去の作物を照らす所の怪しげなる狼火とは、その根本に於いて全然異なれる火焔によりて照らさるゝ大傑作は、この文學界に出て來らざる乎。沈默の變形せるもの――この物たる不可思議にして說明すべからず――吾人の上に在り。而して積極的崇高の君權は、今日までは絶對の權力ありたるが、今は早や轉覆せられざる可からざる運命に陷れるものの如し。予は此の問題に關して喋々することを好まず、蓋しかゝる事に關して、明快なる議論のなさるべき時は、尙ほ未だ來らざればなり。然れども予は感ず、精神的自由の頑强なる要求は、

己に人類に對して提出せられたりと。否、或る瞬間には、靈魂は最後通牒(アルティメイト)とも見ゆる外觀を呈することあり。かるが故に、靈魂は吾人をして、何物をも等閑視することなく、眞面目に此の貴重なる勸誘を受けしむるに適せり、而してその勸誘なるものは、永久に無にて終るか、或は一時有なるか、何れとも分かぬ夢幻の境に導くに均しからん。吾人は戒心せざるべからず、靈魂は吾人の靈魂自身を活動せしむる適當の理由なくして已むものにあらず。

固と靈魂は瞑想の高原より來り、瞑想は、此の問題の最も明らかに解決せらるべきことを求むるものなれども、場合によりては些の疑を挾むことなくして、最とも普通なる人生の通路に之れが徽號を發見することあり。蓋し、花はその開くや山頂に於いてすと雖ども、その散るや谷に墜つるが如し。そは既に墜ち果てたりや、予は知らず。然れども少くとも吾人の前に證明せらるべきこと有り、そは極めて卑しき生活を送れる人々の作業の中にも、かの精神的現象は、自己自身――即はち靈魂を靈魂らしくする所の神秘にして直

接なる作用を現はすと云ふことなり、此の一事は、前代の記錄に於いて發見すべからざるものなるが、かゝる事は、その當時爾く明白ならざりしならん。蓋し如何なる時代に於いても、生命の奥に秘める隱れ家に、突入して、その最も神秘なる一門と接する人々あるものなり。これ等の人々が、その時代の心情、靈魂及び精神より學び得たる總ては、吾人の頭上に吊下せられたり、類似せる感化は、これ等の時代に於いてすら働きたりき。されども今日に於けるが如く、爾く不遍的に爾く能動的に、爾く强力ならざりしが、それと同時に、人類の命の泉の深底にも落つること能はざりき。何となれば、かゝる場合に於いて、類似せる感化は、時代の聖者の注意を避けて、沈默の中に經過したればなり。予は今「科學的精神主義」或は、その心交的現象に關つらひ、「唯物論」に關つらひ、又は如上予が說述したる他の顯現に關つらふことをなさず。然れども、予は不意の出來事、即はち一切人間がその恐ろしき生涯に於いて、絕えず遭遇する所の事柄に關らふものなり。かゝる人々は、自己の永刼の權利を忘却し易し。普通の教科書的心理學には關するところ無かるべしとの考は、吾人の心中に起ることとある可し——かゝる心理學は唯だ、精神（Psyche は希臘の神話中に在る蝶翼の美婦なり、精神のことを云ふ。）の美名を簒奪して、最も密接に物質と混交せるが如き精神的現象を考究するものなり——吾人の說きたる心理學は、超然的のものにして、靈魂間の直接關係を闡明し、またその特殊的存在并びに、知覺を闡明するものとす。心理學は少年時代に屬する科學なり。然れども此の力によりて、人は大にその勇武を進むるなるべく、心理學はまた、最も疾やかに、今日まで君臨したりし初歩的心理學を永久に排斥するなるべし。

此の「即席」心理學は、深谷の底をも包圍しつゝ、高山の巔より降下するものにして、その存在せることは、平凡なる文學の中にも感得せらるべし。而して世にはこれよりも明らかに、靈魂の壓力が人類の間に增加し、且つその神秘なる感化が、人々の間に散布せることを證明するものはあらざるなり。然れども、吾人は今や、殆んど說述す

べからざるものゝ側近く引き寄せられぬ。人々の示し得るが如き例證は、必然、普通にして且つ不完全なり。次の如きは初等的にして鑑査に價す、古代に於いて、若し或る瞬間に、現存と云ふことに關し、又は遭遇したる機會或は觀察によりて、導かれたる怪しき印象に關し、又は人倫の不知案内なる側面を支配する決心と云ふものに關し、又は干渉或は説明すべからざる威力といふものに關して、疑問を挿むことありとも、尚ほよく同情と友情、或は制限的親和と本能的親和、或は未だ曾て語られざりし物の非常なる感化力の神秘なる定律に關しては、之を理解することを得しならん。——古代に於いては、かゝる問題は不注意に過ごされしなるべく、又思想家の平和を攪亂するが如きことは有らざりしなるべし。かゝる問題は、單純なる機會によりて廻り來るものゝ如し。そは絶えず大勢力を以て人生の上に銘刻せらる——こは總て疑ふべからざることなりき——而して哲學者は、親しく感情及び、外面に漂ふ出來事に關して、研究を爲さん爲めに歸路を急ぎぬ。

かゝる精神的現象に關しては、從來、最賢、最大なる吾人の同胞すらも、何等の考をも廻らさゞりしが、今日に在つては、熱心に、小人輩によりてすら研究せられつゝあり。而してこれが爲めに左の如きとは明瞭にせられぬ、曰はく人間の靈魂は、無比なる統一の樹なり、その枝には時來れば花滿開すと。靈魂中に横はれる表現の力は、俄然として野人に與へられん。此の瞬間に於いては、曾つてラシイヌの靈魂中に在らざりし理想現はれ出でん。かくの如くにしてセキスピイヤや、ラシイヌより劣等なる天才を有する人にても、尚ほ、燦然として神秘的に輝く人生の光明を、自己の心中に描くことを得可し。而かも只だ、その外皮のみ、かゝる達人に認知せらる。蓋し大靈魂は、何時にても、何處にても、孤獨にして彷徨ふものにあらず、その助けなくして在るは、極めて稀なることなり。靈魂は萬衆の花なり。精神海に嵐の過ぐるや、その表面は悉く奔騰し、悉く洶湧す。此の瞬間こそは、大靈魂の現はるゝ爲めに有益なる時なれ。然れども、之にして若しも睡眠の中に來らば、その説

話や、唯だ南柯の一夢に過ぎざらん。

ハムレット――多くの例の中、最とも著しきものを擧ぐれば――エルシノアに於けるハムレットは、各瞬間に於いて、覺醒の懸崖に進めり。而して彼れの憔悴したる顏面は、冷汗を以て浸さるゝに至りしも、尙ほ彼れが語り得ざる言語ありき、その言語は今日なりせば、恐らく彼れの唇を洩れて響かん。蓋し漂浪兒のにもせよ、盜兒のにもせよ、行人の靈魂は彼れを拯はん爲めに此處に在ればなり。げに靈魂を包む帷幕のあらざることは、事實らしく見ゆ。

若し今ハムレットにして、その母若しくば、クロウジアスの眼差を見詰むることあらば、その當時彼れが知らざりし事を發見するならん。汝は全く――此の物は、眞理中、最も不可思議にして、最とも不安なるものなり――と云ふことを知らざる乎。汝はまた確かめざる乎、若し汝の胸中に災禍ありとせば、汝は今日恐らく、二三世紀以前にもまさりて、百度も之を絶叫すべきことを。汝はまた知らざる乎、若し汝にして、今朝、人を悲しましむるが如きことを爲せしとせば、汝と共に雨か嵐かなど語り合へる農夫は、能く汝の行動を知らん。――彼の靈魂は、彼の手が戸を開放する前に、既にそを豫知し居りたるなりと。汝たとひ、使徒や、英雄や、義士の容貌を觀るの明あらんとも、傍を過ぎゆく小兒の眼は、汝にして心中に邪惡なる思想、不公平なる考を持つとするも、はた又た同胞たるの涙を有するとするも、決して懷かしげなる微笑を以て汝を迎へざる可し。その兒の靈魂は、恐らく今より百年以前に、何等の注意をなすこともなくして、汝の傍を過ぎりしものなる可し。……

觀察の上に信を措きて、胸中に起る嫌惡、怨恨、不信を慰撫するは、今や困難なることとなりつゝあり。蓋し靈魂は、その最も無頓着なるものにても、吾人に對して不斷の警戒を加へつゝあればなり。吾人の祖先は、かゝる事に就いては語り傳へざりき、然れども、吾人は吾人自身を活動せしむる生命は、彼等の云ふ所のものと全然異なれるものなることを實現す。彼れ等は、吾人を欺きたりしか、或は又た知らざりしか。徽號や、言語は、今は早や考慮せらるまじ、唯だ神秘なる範圍の中にこ

そ、殆んど總てを決するものは存在するなれ。

昔時の「意志の力」――こは論理的意志力にして、人は皆なよく之を理解するやう公言したり。――此の力すらも今は變形せられんとし、また、偉大、深玄にして、說くべからざる定律の壓力に逢ひて、その典型の中に入らんとしつゝあり。最後の拒絕は現はされず、而して人々は互に引合ひて接近す。人々の僚友を批判するや、言語及び行爲の上よりす――否、思想の上よりす――蓋し人々の見る所の物は、之を理解せざるにも拘はらず、尙ほよく其の思想の領域內に橫はるものなればなり。こは大なる徽號の一なり、此の徽號によりて、前述の精神的時期は明白にせらるゝなる可し。左の如きことは、一切の方面に於いて感知せらる、曰はく、日常生活の狀態は變化しつゝあり、而して吾人の中最も若きものは、已に全く、その言行に於いて、先進の士と異なるものなり。無用なる舊套や、習慣や、口實や、媒介やの一群は、深淵の中に蕩盡せられたり。吾人は見えざる物を知らず、然れども各自互に批判し

得るは事實なり。若し予にして、始めて汝の室に入らんか、實際的心理學の原則に從うて、各人がその友の在る中に綴るが如き文章を、汝は綴らんとはせざるべし。而して汝は無益にも予の誰なるやを知れる筈なりと予に語るべく試むるならん。然れども、汝は不思議の確信を抱いて、遂には予に還り來るべきなり。汝の父は予を批判したりしならんも、そは恐らく誤りてありしならん。吾人は只だ左の二事を信じ得可し、一に曰はく、人は直ちに人に接するならん、二に曰はく、境遇は變化するならんと、クラウド、ド、セイント、マルチン問ふらく、「吾人は」絕大にして「知られざる哲學者を有するか。」「吾人は夫の光輝燦然として、人生を素朴ならしむる文明の路上に、一歩を進めたりや。」と。吾人をして沈默の中に待たしめよ。然らば則はち、日ならずして、「神の囁き」を覺知するの時來らん。

先定論

運命は總ての人に知らる、之を見ざ

る人は殆んど無かる可し。運命は恐らく、苦痛が常に人生に伴ふ如く、人間に取りては避くべからざるものならん。運命が由つて以て住する所の人間は、之を知るに隨ひて善良となり、悲しみの心深くなり、將た又溫順となるものなり。

運命は怪むべきものなり　人事一切を小兒と假定して云はんに、運命は他の小兒よりも最も人生に近きものなり。運命の出現するや何物をも疑ふことなく、その眼中には、頗ぶる深玄なる眞理の存在することあり。吾人をして運命は一切を知れることを感じ、又た、世には薄暮あつて、その到るや、運命は自ら、自己の秘密を語る時機なりと悟ることあるを感ぜしむ。他の小兒、即ち運命の兄弟が、生誕と生涯との間に位する神秘の國土中に、自己の行くべき道程を模索する時には、運命は既に一切を理解し了れり。運命は神より選ばれたるものなり。豫じめ手と靈とを以て整へらる。運命は倉卒の程、また、かも巧みに、また微細なる注意を拂ひて、自己の生命を保つべき準備をなす。運命は一の記號なり。未だ曾て說き盡

されざりし一切の秘密を疑はざる程、聰明なる人は、稀れに此の記號たる運命を觀察し得ることあり。

吾人の裡に運命の停まる間は、頗ぶる短かくして、殆んどその存在を覺知し能はざる程なり。彼等の一語をも交へずして去るや、吾人は永久に之を解し得べくもあらず。然れども他の小兒は、暫しの間彷徨して、微笑を含みつつ吾人を眺むること、宛かも、運命こそ一切を知悉せるものなれ、と告白するもの丶如し。人二十歲に到るや、運命は足音もさせずして、倏忽焉として吾人を見捨て丶去る。その狀宛から、自己が誤つてよからぬ住所を選擇し、また己の知らざる人間の中に、自己の生命を宿さんとせしことを發見したるものの如し。

運命は獨語す、されどその獨語するや稀れに、時として暗雲の身邊を周匝することあり。暗雲の懸るや、人が自己に接觸したりと見ゆる時、若しくは或る害惡が、自己に加へられたりと見ゆる時を以てす。運命は往々吾人と共に存在し、吾人の間に停滯する日あり。されども恁かる日は俄然として暮れて、

吾人か面接して疑問を質さんと欲するも得べからざる程、遠く〳〵逸し去るなり、かゝる時、運命は雲山千里、人生の彼岸にあるものゝ如く、感情動いて衷に激し、遂に、友誼や、惻隱や、戀愛よりも、更に深く、更に眞面目に、更に人らしく、更に實際らしきを確認すべき時來るべし。吾人の物言はんとするや、何物とも知らず翅を擴げて、吾人の咽喉の後部を掩蔽し、而かも尙ほ說話せんことを懇望す——此の物たる、叡智にあらずば闡明すべからざるものにして、無智吾人の如きは、過去に於いて、はた現在に於いて、到底之を說き得ざりしが、未來に於いてもまた決して說き得ざるものなり。蓋しかくの如くにして、多數の人生は沈默の中に送らるゝならん。忽焉として時は來れり、誰かよく吾人と共に彷徨して、遲くまで待ち續け、以てその說話を聞かんとするものぞ、かくの如きは一人だも有らざるか。

何故に運命は吾人に來る乎——何故に爾く速かに去る乎。そは吾人をして生活の目的を論證せしむるものたるに止まらざる乎。運命の來去は、實に神

秘にして、神秘は常に吾人を避け、吾人にして如何に搜索せんとするも、そは全然無効なるものなり。予は屢々次の如き出來事に接せり。一日予は運命に接近せり、されどその距離は、予が此の運命は、予自身のものなる乎、將た又た、そが由つて以て纏はらんとする他の人のものなる乎を見定むること能はざる程なりき。……

此處に予の兄弟死したる場合を假定して云はん。彼はたとひ、無意識ながらにも自からよく前兆の囁——一例せば、その幼年時代より自己の體中に病痾の萠孽を隱匿せりしが如き——を聞き得たるのみなりとするも、尙ほ能く、何事が自己の中に起るべきかを知り居たるものなり。恐ろしき事實によりて待ち受けらるゝ人々を分割せしむる徽號とは如何なるものぞ。世には見らるべきものとてはあらず、されども總てのものは皆な現はされたり。吾人は常に全力を以て反抗し、自己の知力を以て運命を闡明せんと欲す。これ即はち運命が吾人に對して、恐怖心を抱く所以なり。吾人と運命と共に在るの時に當りては、運命はよく、吾人の心が先

定的運命の壓する所となれることを看破し得可し。而して、世には、人々には隱しながら、自己さへも、その何たるやを知らざるものあり。訝かしき生死の秘密は、最初に逢ひし兩人の間を通過す。而してこれ以外の多數の秘密は、今日に至るまで、名だに附けられざりしにも拘はらず、忽焉として、吾人の動作や、身振や、樣子の上に其の印象を銘刻す。吾人が友の手を握る間にすら、吾人の靈魂は、人生の境涯を脫離して、恐らく高々と翺翔せん。二人の共に在るや、ある隱されたる思想

については、全く無意識なりと雖ども、思想よりも更に尊きものあつて、深玄の裏に橫はることあり。吾人はかくも尊き無底の賜を有する天人にあらず、吾人は曾て、語るべき舌を與へられざりし豫言者の出現を希ひしものなり。吾人は決して他者と同じからず、己れ獨り在る時の如くにはあらざるなり。暗黑の中に共棲せる時すらも、吾人は他の者とは差異あり。吾人眼中の映象は、過去と、未來の去來に應じて變化す。故にたとひ吾人は之を知らずとするも、尙ほ常に之を監視し、以て之を

掩護せんとするは事實なり。吾人にして、命の旦夕に迫れるものを見ん乎、只だ能く、その人の上に懸れる命運（フェート）なるものを覺知せん、然れどもその以外に至りては、吾人はよく之を闡明すること能はず。彼れ等若し、吾人を欺き得たりとし、又欺かんとすることあらば、これ最も確實に自己を欺けるものなり。運命は吾人を迷はさんとしてその力を傾注す。運命はまた想像すらく、自己の熱心なる微笑と自己の熱烈なる生活の興味は、眞理を蔽塞し得べしと。かるが故に出來事の起るや、そは吾人の前に過大視せられ、大黑柱、否、運命存在の理由なりと考へらる。死なるものゝ再び懇願するや、運命は最大苦痛となりて現はれ來る。此の苦痛や、吾人よりして何物をも隱すことなく、その中には有り得べからざる一種の聲あつて聞こゆ。

誰れかよく出來事（イベント）の有する勢力——

此の勢力は運命これを吾人より發生せしめ、或は、吾人自から運命より之を借るものなり——に就いて、吾人に語り得るものあらんや。吾人運命を牽引するか、吾人運命によりて牽引せらる

るか。吾人運命を造るか、運命吾人を造るか。運命は常に自己の過程を誤ることなきか。何の故を以て、蜂の窩に來るが如く、鳩の檻に來るが如く、運命は吾人に向ひて來るか。吾人にして運命に逢はん爲めに出で來ることなかりせば、運命は何の處にかその安息所を定めんとする。何の理由によりて彼等は吾人を訪ひ、何の故を以て吾人は運命の姿を想像中に描くこと、宛から兄弟の如くなるか。運命の活動は過去に存ぜしか、將た又た未來に存ずるか、而してその最も優勢なるものは、最早存在せざるか、はた尙ほ存在しつゝあるか。吾人は尙ほ未だ機會の來らざる事業の影を趁うて、その生涯の大部分を過ごせしにはあらざるか。上の如く、予は、種類こそ異なれ、姿は同じき眞面目なる姿態に就き、機會未だ到來せざるに、早くも目的を趁うて駈くる足歩に就き、血を冷すものゝ存在に就き、一定不變の觀察に就き叙述したり——予は實に、如上のものが、人間の中に包まるゝことを叙述し了れり。而して此の人間たる、大切なる目的をすら、偶然の出來事によりて定めらるべく、又常に死神の爲めに、突如として外界より捕へられんとす。しかも運命は、自己の體中に死の種を蒔く同胞とひとしく、頗る熱心にてありたりき。運命の顏は、その同胞の顏にひとし。然れどもその生命に至りては、差異あり。運命に賦與せられたる生命は、出來得る限りその延長を擴大せんとする同胞の生命よりも、更に〳〵眞面目なるものなりき。而して、愼しみ深く、靜やかなる監視は、常に均しく兩者の間に注がれたり。彼れ等は費やさんと欲するも、費やすべき時を有せず、恒に均しき時間内に準備を整へざるべからず。恁くの如くにして、豫言者が未だ曾て豫言し能はざりし事業は完成せられ、そは始めてこゝに、彼等の生命中の生命とはなれるなりき。

死とは吾人の生命の案内者を謂ふ、吾人の生命は何等の目的を有せず、されど死を有せり、死は型なり、吾人の生命は型に瀉がる。死はまた吾人の姿態を形造るものなり、肖像畫は只だよく之を死より描き得可し、蓋し、肖像畫は、自己自身こそ眞の肖像畫なればなり、一例せば、立てる人は、立てる

人として現はるゝが如し。强く、寒けき光明の、今將に絶えんとする自己の頭上に放たるゝ時、如何なる生命かよく燦爛として輝くものあらん。此の光明や、恐らく、小兒が吾人に面して微笑む時、その顏面にひらめくものと均しかる可し。吾人の頭上を窺ふ所の沈默は、永刼の平和を藏する靈廟の沈默に似たり。予は死神の手によりて導かるゝ多數の人を知れり、而して予の記憶の運命の上に置かるゝ時には、予は只だ、小兒や、青年や、處女等の一群を見るのみならず、彼れ等は皆な同一の家居より前進し來るものゝ如くに思はる。訝かしき同胞の觀念は、已に運命を統一せり、運命は吾人が發見し得ざる生得の目標(メアアス)によりて、各自互に認識することあり、また秘かに崇嚴なる沈默の記號を交換することもあり。運命は早熟せる死の童子の熱心なるものなり。吾人は學舍に於いて略ぼ既に彼等を覺知したり。運命は同一の時を以て、互に求め互に避くること、宛かも同一の疾病より苦しめらるゝ人の如し。運命は樹葉鬱蒼として繁れる庭園の幽暗なる一角に於いて見らるべきものなり。運命の神秘なる微笑は、適確にその唇の上に泛べられ、神秘にして免れんとせざる以上は、一種の不可思議なる恐怖の下、一種の眞面目なるものあつて閃々として閃めかん。生存せざる可からざる樣々の運命が互に接近するや、沈默は殆んど常にその頭上に墜ちかゝらん。運命は早く已に出來事に就いて語らざりしか、將た又た出來事は彼れ等の間に語られて、いたく嫌忌せられしことを知らざるか。運命は出來事を繞れる周圍を造りて、之を無頓着なる眼に見せしめんと試みざりしか。

此處にまた運命の神が、高塔の上より吾人を瞰下せりと思はるゝ時あり。吾人の力は强きにも拘はらず、運命を屈せしむること能はず。盖し世には眞に隱さるべきものとては一つだも有らざらん。予に逢ふ所の人々にして、皆な予が已に成し遂げしこと、若しくは成さんとすることを知り、また予が已に考へたること、若しくは考ふることを知れり。否、彼はよく、その日を以て予が死すべきことを知れり。然れども知りたることを語るべき手段は、彼に附與せられざるなり、彼れ假令大聲を

以て話し、又は自己の胸中に囁くとても、決してそを語ることを得可からざるなり。吾人は、吾人の手の觸るゝことと能はざるものゝ傍を過ぎる。而して過大なる知識は、假令吾人の知らざるものゝ總てが、吾人に啓示せられたりとするも、所詮は吾人の知識たらんのみ。吾人の眞生命は、吾人が活くる所の生命にはあらず、而して吾人は、吾人の深玄なる、否、吾人の最も親しめる思想が、吾人自身より分離したることを感得す。これ即はち、吾人と、吾人の思想及び吾人の空想とは、別物なるが故なり。吾人が吾人自身の生命を保つことは、單に或る特殊の瞬間に於いて存ず——或はまた偶然の出來事によるものなるやも計られず——吾人が吾人てふものにてあらん時、天は則ち曙けんとするにはあらざるか。……此の間に於いて吾人は感得すらく、運命は吾人の中に彷徨するものなりと。恐怖の感覺は吾人の生命を匍匐す。運命は時としては、吾人と共に廊下に沿うて歩み、或は庭園の中を歩む、而かも吾人は彼等と同一の歩調を保つこと能はず。運命はまた時としては、吾人と

共に遊戯せんとす、而かも遊戯は最早や同一の物たらざるべし。世には自己の同胞を發見すること能はざるものあり、彼等は吾人が嬉戯談笑せる間、吾人の間を單獨に彷徨す。彼れ等は未だ死すべき機會に遭遇せざる人々の間に一の友人をも持たず。而かも尚ほ吾人は彼れ等を愛し、彼れ等の眼より溢れ出づる深厚なる友情を愛す。吾人と彼れ等とを區別する所のものは何ぞ。吾人と一切とを區別する所のものは何ぞ。吾人が其の底に於いて生命を保つ所の神秘の海とは、如何なるものなりや。

吾人が感得する所の戀は、努めて自身を現はさゞらんとす。何となれば、戀は此の世のものにはあらざればなり。戀とは、恐らく、證明すべきものにはあらざらん。戀は或は弱く、或は不確實に見ゆ、而して最も小さく、最も普通なる友情は、戀よりも勝れて見ゆることあり——然れども戀の生命は吾人の生命よりも深玄なり。それ戀は、その外觀異る所なきにも拘はらず、疑問の氷解せられ、不確實の確かめらるゝ時には、猶ほよくその姿を保つものなり。……

今や戀の聲は、戀の聲自身をして聞かしむることなし、その故は說話すべき戀の瞬間未だ來らざればなり、而して戀なるものは、吾人が最愛の腕を以て、抱く所ろの人々にはあらず。何となれば、生命には一側面あり――そは最善、最醇、最高のものなり――此の一側面は、決して、他の普通の生命とは混同さるべきにあらず。それ双眼は、戀人自身のものすら、尙ほ且つ、沈默と愛戀とを建築するところの大工を看破することあるなり。……

吾人よりも年の若きに拘はらず、運命は尙ほ吾人の長たる故を以て。吾人は彼等を避けんとするにあらずや。……

……吾人は、運命が吾人と同年にあらざるを知りしにはあらざる乎。運命は吾人に對して審判を下すが故に、吾人は彼れ等を恐るゝにはあらざる乎。訝かしき決斷の色は、已に業に運命の眼中に輝けり。たとひ吾人の煩悶の瞬間に於いて、運命の瞥見が吾人の上に注がれしとするも、そは能く吾人を慰藉するならん。吾人は何故に、不可思議なる沈默の一刹那あるかを知らず。吾人は今や一轉回せんと欲す、運命は吾人

を監視せり、冷やかに笑ひつゝあり。此處に兩個のものあり、死神は彼れ等を待ちつゝ横はれり――予はよく彼れ等の面を知れり。されども殆んど全く臆病にして、知らざる儘通過せんとせり。運命は峻峭なる羞惡の觀念によりて秤量せられぬ、彼れ等は常に失敗の忘却せられんことを希冀せるものゝ如し。その失敗を彼等は知らずと雖も、失敗は彼れ等の手に接近してありき。運命は吾人に向つて進み、吾人の眼は運命を見る、吾人は靜かに彼れ等を離れぬ、かくて吾人は何の知る所なきにも拘はらず、萬物一切、皆な吾人に接近したりき。

神秘的道德

吾人の中には不可見の王國存在す。その王國の輿論は、吾人の保持する思想によりて、任意に創起せられたるものなるや明らけし。吾人の直覺は、總てこれ覆面したる女皇なり。吾人は彼れ等について語らんにも、その語なきにも拘はらず、覆面女皇は一生涯の間、吾人の通路を進むものなり。吾人が言

語によりて、或る事柄を表現せんとするや、その事柄の直ちに減少せらるゝは、これ何等の不可思議ぞ。吾人は信ず、吾人が底止知れざる深淵の底に潜り入りて、再びその水面に浮び來るや、わなゝける指頭に滴る水滴は、その始め在りし海のものとは似もつかざることを。吾人は又た信ず、吾人が珍寶充ちたる洞穴中に入りて、再たび日光の照れる所に歸り來るや、その携え歸りし璧玉は、僞物――硝子の一片――なりしと雖も、尙ほ絕えず闇中に於いて、燦然として光を放つにあらずやと。吾人の肉體と、吾人の靈魂の間には、一種の物あり、何者もこれを說明し能はざるなり。玆にまた一瞬間あり、エマアそン曰はく、「吾人は此の間に、少くとも實在は發見せらるゝならん、銳き眞理の一端は發見せらるゝならんとの希望を懷きて、苦痛を求むるものなり、」と。

予はまた說きぬ、曰はく、人間の靈魂は、各自互に牽引せるものゝ如し、こは假令、證明することを得べき確論にあらずとするも、尙ほ朧ろげながらも深き根蔕を有せる確信の上に築かれたるものなりと云ふ可しと。靈魂に支持せられながら、事實(フヴクト)を進むることは困難なり、蓋し、事實とは、吾人の見る能はざる大勢力の間牒、從卒、或は肖象たるに過ぎざればなり。吾人は、祖先の感じたるよりも更に深く感ずるが如き瞬間あり。その時に於いて吾人は感ずらく、われ等は單に孤りにて存在せるものにあらざるなりと。有神論者にもせよ、無神論者にもせよ、恰かも自己が孤獨なることを確めしものゝ如く、己れ獨りにて行動し得るものあらざるなり。吾人は常に監視せらる、吾人は常に嚴格なる監督の下に在り。而して靈魂は、放縱にして暗黑なる人間良心の蔭より來るものにあらず。精神の壺は、今日に於いては、恐らく往日の如く嚴かに密閉せられてあらざる乎、また一種の强き勢力は、吾人心海の波浪中に加へられてあらざるか、予は之を知らず。されども吾人が確信すべきことあり。そは、吾人は最早や、前代より承繼せる失錯を重要視せざれども、そはそれ自身に於いて、精神的勝利の紀念と目せらるべしと云ふことなり。

霊魂は恰かも吾人の道徳の典章の如く、變化しつゝあるものゝ如し――尚ほ未だ見ること能はざる高遠なる霊境に向つて、臆る〳〵進みゆきしものゝ如し。恐らく一瞬間は來るならん、その時には或る新疑問は質されん。吾人をして云はしむれば、たとひ吾人の霊魂は、俄然として目に見らるべき姿を造ることあらんとも、またその覆面を悉く脱ぎ捨てゝ、神秘なる思想を背負ひ、最も神秘にして、説明し難き生涯の行爲を提さげつゝ、自己の姉妹の稠座せる中央に進みゆくことを迫られたりとするも、果して何事か起るべき。霊魂は如何なる事をか恥かしく思ふべき。霊魂の隱さんとするものは何ぞ。霊魂はかの遠慮勝なる少女の如く、肉につける無數の罪を、その長き髪の下に覆はんと欲するか。霊魂は罪については何事も知らず、罪は決して霊魂の側近く行き得べきものにあらず。罪は霊魂の玉座より千里を隔つる彼方に在り。娼婦の霊魂すらも、尚ほその眼中には、小兒の如く淨らかなる微笑を泛べて、安んじて群衆の中を過るなるべし。霊魂は障碍を有せず、霊魂は光輝燦然として頭上を照らす處に、その生涯を送るものなり。この生涯こそは、霊魂が由つて以て自己を甦らすことを得べきものなれ。

宇宙間には、霊魂が所罰せらるべき罪過ありや。霊魂は迷はされ、瞞かされ、欺かれたりや。霊魂は苦痛を加へられ、或は涙の種を與へられたりや。この人間が敵に對して、霊魂の兄弟を引渡せし時、霊魂は何處に在りしや。恐らく、遙かに人間を離れて、嗚咽しつゝあらりしならん。而してその瞬間より、霊魂は最も美くしく、最も深くなりまさりしならん。霊魂は自己の爲さざりし所のものに向つては、何等の責任をも負はざるべし。霊魂は恐るべき殺人罪の中にも、尚ほ聖らかなる姿を保つ可し。霊魂はまた屢々、凶禍が己れの前に織り出す所の内部の光輝中に、その形を變ずるなるべし。これ等のものは、見ゆべき原則によりて支配せらる、而してこれより以後、そは疑もなく、神々をして怠惰ならしめたり。

吾人の怠惰もまた之に由りて引き起されたり。出來得る限り努力せんには、吾人は許さるべきものとす。而して我

人が死する時には、「絶大なる慰藉者」床の傍を過ぎるべし。此の時、肉を離れゆく靈魂の上に靠れ懸りて、許しの驗を手に持ちながら、尙ほ慰藉者の膝下にひれ伏さゞるもの、吾人の中に一人にてもあるべきか。予が强敵の前に立つて、予を誣ひし紫色の唇を見詰むる時、予をして誤らしめし冷めたき手を見る時、予をして屢々涙を催さしめし視力なき目を眺むる時——汝は、予が尙ほ敵について考ふると想像するか。死は來れり、一切は償はれたり。予は予の前なる人の靈魂に對して、悲を催すことなく、たゞ本能的に、そが酷だしき誤と、深き過との上に高く飛び翔れることを認むるのみ。(此の本能は何等無意義にして、また驚くべきものなるぞ!) 若し予の心中に、一の愛惜の情のたゆたふことありとせば、そは予が苦痛を受くるに不適切なるにあらずして、恐らく予の愛が小さく、予の許が遲きに過ぎし爲めなるべし……

人は殆んど信じ得可し、かゝることは、既に吾人によりて理解せられ、深く吾人の靈魂中に沈下せられたりと。吾人の僚友を批判するや、その行爲によりてせず——否、その最も神秘なる思想によりてせず。蓋し、これ等のものは、常に見分け難きものにあらざるに、吾人は見分け難きものを超えて進みゆかんとす。或る者は、一切の人より忌み嫌はるべき罪を犯すことあるべし。されども、かゝる汚點すらも、或る瞬間に於いては、この周圍を匝れる香ばしき息と、永への淨さとを汚すことなかるべし。哲學者及び、義士の現はれ來るや、吾人の靈魂は耐へ難き憂鬱の中に擠さるゝことある可し、使徒や、英雄やは、卑しき思想の印章とも見ゆる顏せる人々の中より、その友人を選ぶことあり、また、高大なる空想もて輝けるが如き貌せる者の側に在りながら、毫も人間らしく、同胞らしく感ぜざることもあり。如何なる報知か、かゝることを吾人には齎らす。またかかる事の意義は、何れの點にか横はれる。宇宙には、思想や、行爲を支配するこれ等のものよりも、更に深き定律なるものありや。吾人の知れる所のものは何ぞ、何故に吾人は常に定律に從ひて行動するか。その定律や、未だ曾て誰れ人にも、考へられたることあら

ざりしが、實に正大なる唯一の方則にして、古今を通じて謬ることなきものなり。予は大膽に宣言し得可し、曰はく、英雄や、使徒の外貌を選擇する、共に誤るところなかりき。彼等はたゞ忠實なりしのみ。たとひ使徒にして、己が選びたる人によりて欺かれ、且つ賣られたりとするも、其處には尙ほ永久に消滅せざる物ありて、彼れと共に殘らん。此の物や、實に彼をして、自己の正しくして、一も悔ゆるところなきを知らしむ。靈魂は常に他の靈魂の、淨らかなりしことを記憶するならん。……

神秘を覆へる神秘の石を動かさんとするや、陰慘なる氣體は、深淵の中より湧きて、言語や、思想やは、毒蠅の如くに吾人の周圍に落ちん。吾人の內的生命すらも、かくの如く不變化なる深さを有するを以て、普通有り觸れたるものゝやうに思はるゝことあり。天使が汝の前に立つ時、汝は罪を犯すことなくして之を祝し得るか。而して其處には、一種の劣等なる無邪氣なるものあらざるか。耶蘇キリストが、カペナウンの中風患者を繞れる、パリサイ

人の邪心を知りし時、キリストは彼れ等を眺めて、その靈魂を審判し——且つ宣告を下して——彼等の思想とは全く異れる、永刼不滅の光輝（ブライトネス）を觀破することなかりしと、汝は確言するを得べきか。而して彼れの宣告は、廢棄すべからざるものなりとするも、彼は果して神なるべきか。さはれ、彼は何故に入口に彷徨ふものゝ如く、それかれが如く喋々として語りたりし乎、かの卑しき思想や、高き靈感は、金剛石の表面にその一標點を殘すべき乎。如何なる神か、吾人の眞面目なる過誤に對し微笑すること、宛から、吾人が爐邊の小犬に對して微笑する如くなるか、また如何なる神か微笑せざらんとするか。若し汝にして眞に醇粹となりたらんには、その大事業の動機となりし一小些物を、己の前に立ち給ふ天使に隱さまく欲りすと、汝は考ふべき乎。而して尙ほ吾人の中には、山上に神集ひし給ふ神々の目には、世にも見すぼらしく見ゆものあらざる乎。そは確かにあるなるべし。吾人の靈魂は、またよくその負債を返却せざることを知れり。靈魂は沈默の中に住す。神の宣告は、た

とひ吾人の眼界以外にありと雖ども、大審判の手は常に靈魂の上に懸れり。然らば靈魂は、如何なる負債を返却せざるべからざる乎。何れの處にか吾人は、吾人を導く道德の典章を發見すべきか。遠く吾人の思想を離れたる處に、權力を有する神秘的道德なるものありや。最も神秘なる吾人の慾望は、たよりなき衞星の如きものにして、そは吾人の眼中に入らざる中央星の附庸にあらざるか。透明なる樹木は吾人の中に存ぜりや、而して吾人の總ての行爲や、總ての道德やは、その束の間の花や葉やに過ぎざるにあらざるか。吾人は知らず、吾人の靈魂の冐す所の罪惡は、何物なるやを。又知らず、吾人をして高き智識、或は他の靈魂の前に赤面せしむるものゝ有るや否やを。尙ほ又知らず、如何なるものか、純粹なる靈魂と、將に來るべき批判を恐れざることを吾人について感得するかを。將た又た知らず何れの處に、他の靈魂を恐れざる靈魂のありて存ずるかを。

＊　＊　＊

熟知せる人生の谷間や、精神的生涯の中に、吾人の在るは、最早長くはあらざるべし。吾人の在るは、今や第三の境涯の戸前に在り、この境涯は神秘の永久的生命の中に在り。吾人は入口の階段を上る時の如く、臆病にも摸索して、一歩一歩に注意せざる可からず。入口を過ぎる時すらも、吾人は何處に眞理のあるやを知らず。吾人は何れの處にか、吾人が永久に背反すべき神怪なる定律を發見すべき。此の定律の存在せることは、吾人の靈魂こそ豫知したれ、吾人の良心は全く知らざるなり。時として吾人の生涯を匍匐し、之をして堅牢ならしむる神秘的罪業（トランスグレッション）の影は、何故に來るならん乎。吾人が罰せられん程の精神上の大罪とは何ぞ。そは吾人の靈魂と、神との間に於ける見えざる爭鬪なりや。而して此の爭鬪は、四邊閑として、一の微聲だに聞えざる程靜かなるものなりや。世には瞬間ありて、その瞬間に吾人は唇の鎖されたる女皇の無聲の聲を聞き得ざるか。此の女皇や全く沈默にして、或る事業のなさるゝ時のみ、表面に泛び出づるものなり。されども世には吾人が殆んど注意せざ

る他のものあり、そは永刼の底に深く根ざせる根蔕を有せり。或るものは死に瀕し、或るものは汝を眺め、若しくは絶叫せり、その他のものは始めて汝の方向に進み來り、若しくは敵の側を過れり――此の時女皇は囁やかざらんや。而して汝は彼の女の無聲の聲が、汝の今面晤談笑せる友人は、未來に於いて愛せざるに至らんと告ぐるを聞かざる乎。さはれ、こは何物にもあらじ、又もとより表にちらめく地獄の火にもあらじ。誰しもかゝる物について語り得るものなし――寂寞は餘りに大なればなり。ノウフ゛リス曰はく、「靈魂が靈魂自身を活動せしむることのみは、事實上何處にもあり。何の時にか、靈魂は一の完全物として動き、何の時にか、人道は一の良心を以て、感じ得らるべき乎」と。良心の起るや、始めて人は知悉するを得ん。吾人は此の秀てたる良心が、次第に徐々として形造らるゝまで、忍耐して待たざる可からず。その時來らば恐らく偉人は出現して、神怪月姫の顏にも似たる靈魂に關して、吾人の感ずることは何なるかを現はすに至るならん。

婦人論

宇宙間には、人の知らざる定律あり。われ等の頭上を蔽へる高天の中央に於いて、先定せられたる戀の星影懸る。戀の星影は星辰の氣中に在り、自ら輝きて自ら照らす。吾れ等を鼓舞する所の感情は、凡て甦生して、その力の續く限り存在せん。假令吾人は、天上若しくば地上に於いて、左を選び右を選ぶことあらんとも、將た生涯の行爲を圍繞せる恍惚たる圓周を破壞せんとして奮鬪し、以て吾人を動かす本能に從ひて猛暴なる事をなさんとも、又は運命の選擇に反抗して、自己の欲するまに選擇せんとし、敢て困難を辭せざらんとも、神より賜はりし婦人は、永久不變の星界より一直線に吾人の許に來るを常とす。たとひ吾人にしてドン、フワンの如く、二千三千の婦人に交はること有りとするも、腕々相離れて股に垂るゝ時、唇々相別れて噤まるゝ時、吾人はその戀人なるものは、善からんとも惡しからんとも、柔しからんとも殘忍ならんとも、愛らしからんとも不

實ならんとも、ひとしく是れ吾人の前に佇立する婦人にして、その皆な同一なることを知らん。

蓋し吾人は光明の小圓周中より、吾人の足跡を追躡する運命を發生せしむること能はず。而して此の通過し難き圓環の廣袤と色彩とは、大に吾人と趣を異にせる人々にすら知らるとは、人の能く信じ得べき事柄に屬す。此の物たる、精神的光明の色素を有し、人々が一切の事物に先んじて、感受し得べきものとす。かるが故に、軈ては時來りて、彼等は微笑しつゝ、吾人に對して握手すべくその手を差伸ばすか、或は恐を以て引込ますか、二者中の一を選ぶに至らん。

宇宙間には、一の超越せる別世界あつて存じ、吾人はその中に在りて各自互に知ることを得るなり。宇宙にはまた神秘的眞理——物質的眞理よりも遙かに深玄なる眞理——あり、吾人にして見知らぬ人に就き、或る觀念を形成せんと試むる時には、直ちに之に依ることをなす。吾人は總て、星にも似たる人間界の通曉すべからざる境に起る次の如き事實を經驗せざりしか。若し

汝にして、海洋の胸中に沒せられたる遠島より、若しくば汝が、此の人ありと知らざる人より、汝に送り來したる書翰を受領したりとせば、汝はよく、見も知らぬ人が事實汝に音信せしものなることを確認し得る乎。而して汝の之を讀む時、確實にして根蔕ある一個の確信——この確信に比すれば、世の所謂確信は、殆んど無きに均しかる可し——生じて、神のみ獨り知り給へる天體の中に、汝の靈魂と遭逢したる此の靈魂に關して曉る所あらざりし乎。更に一歩を進めて、汝は又此の靈魂は、時處に注意せずして、汝の靈魂に對し夢想を抱きたりし事を了解し、若しくば汝の靈魂と血族的關係を有せることを了解し能はざりし乎。不可思議なる認識は、各方面に於いて起る。吾人は到底自己の存在を隱蔽すること能はず。世には精緻にして、凡ての人類を內部にて結合する鎖あり。されども、かの面識なき人々の間に書信の往復をなさしむるが如き小神秘よりも、更に廣大なる此の鎖を太陽の光の前に、闡明し得るものとては一人も有らざるなり。是れ恐らくは微細なる缺隙の一ならん

——その缺隙や、疑もなく無意義のものなれども、尙ほ其の間に一道の幽かなる光明あつて、吾人を滿足せしむる事なきにしもあらず——再言すれば、こは恐らく、暗黑なる扉戸上の小缺隙に均しく、その缺隙を透して吾人は束の間に內部を覗ひ、以て自から、今日に至るまで未だ嘗て發見せられざりし寶庫の洞穴中にて、何事かを成さゞるべからずと、考ふることを得しむるものなり。試みに人の交通せる通路を通觀せよ。然らば則はち、汝はその中に驚くべき統一の存在せることを知らむ。

予は今朝予に對して、書信を送りし二人の何れをも知らざれども、尙ほよく甲に對する予の答は、乙に對するものとは、その根本に於いて全然異るべきことを知り得るなり。予は已に不可見を瞥見しぬ。而して、予の未だ知らざる人が、予に對して音信せし時、予は順序としてよく次の事を知り得べし。若し彼にして今現に予の前に在る友人に音信したりと假定するも、その書翰は予に對するものと、全くの別物なることを。差別は常に宇宙間に存ず——然れども、そは精神的にして、觸覺し得

可きものにあらず。差別は即はち各自互に尊敬する見えざる靈魂の徽號なり。吾人の視力の及ぶ範圍內には、知られざるもの一だも有ることなし、然れども其れ以外に、知られざる場所のある事は疑を容るべくもあらず。それ萬人共同の祖國は、吾人みな各自に行きて會することを得るにより、その復歸するにも還た敢て困難を感ぜざるべきなり。

而して、吾人は、萬人共同の祖國中に於いては、自己の愛する婦人を選ぶ、故を以て、吾人も誤り悖ることなきと同時に、他も亦決して誤り悖ることなし。戀愛の王國は、確實なる大王國にして、他の一切の事物の前に橫はる、蓋し靈魂は最大限の餘裕を有し、戀愛の王國は、その所有せる領域內に存ずるものなればなり。實に、人々は此の間に於いて各自互に認識し、深き尊敬を捧げ、且つその疑問を質すの外、何事をもなさゞるなり——これ宛から、已に世になき亡妹を發見し得たる婦人にも均しかる可し——此間彼等は遠く相離るれば、腕と腕とは結合せられ、息と息とは混合しつゝあり。……かく

の如くにして遂に瞬間は來る、その來るや、人々は莞爾として、自己の生涯を送ることを得可し――何となれば、休止なるものは、嚴格なる習慣に從ふ日常生活の中にも、その必要を認むべきものなればなり――而してその瞬間は、この微笑及び、言明すべからざる瞥見の頂點より來るものなるが、微笑や、瞥見や、よく神秘なる香氣を發し、恐ろしき戀愛の瞬時を經過せしめ、將た又永久に、始めて、接吻したる當時の狀況を回憶せしむ。……

吾人は今こゝに、有らゆる眞理の中、先定せられたる戀愛に關してのみ說述せんと欲す。運命の女神の吾人に對して女子を送り來るや、必ず先づ吾人の爲めに選ぶ――その之を送るや、必ず吾人が無意識的に棲息せる大精神の城砦よりし、機到れば吾人が通過すべき道路の交叉點に於いて、吾人の來るを待ちつゝあり――かくて吾人は最初の瞥見に於いて、よく戀なるものを豫知することを得るなり。世には强力もて、運命の神のみ手を攘はんと企つるもの有り。彼れ等はその眼瞼を壓して、見られざる可からざる物を、見ざるもの

の如くに裝ひ――永刼の力に反抗して、自己の微力を傾注し――以て、自己の爲めにあらず、他の爲めに送られたる者に向つて突進し、敢て定路の横斷を企てんと欲す。さはれ彼等は如何に努力すとも、未來の大澤中に泄へられたる死水は、之を跳躍せしむる由なくして、全く失敗に終らん。かくの如くにして豈に何事か起されんや。純粹なる力は天上より下るものに非らず。かくの如き無用なる時や、接吻やは、決して實在の時の一部分を占め、人生の接吻の一部となること能はざるものなり。……

運命の女神は、時あつて其の兩眼を閉づと雖も、尙ほよく夕暮の幕の垂れらるゝや、吾人は運命の家路に急ぎ、その語る最后の言葉は、必ず運命自身のものなる事を知了せり。げに運命の女神は、よく其の双眼を閉ざす、而してその再び開かるゝまでの間は、これ實に失はれたるの時なり。……

婦人は吾人男子よりも、更に甚だしく運命の支配を受くるものゝ如し。彼れ等は非常なる質朴を以て、運命の判決に服從す、たとへ抗告をなすことあ

りとも、その申立や些の誠實を有せず。婦人は最とも神に近きものなり、彼等は打解けて純粹なる神秘の動作中に、自己の身を投ずるを惜まず。かるが故に、婦人によりて一部分を占めらるゝ吾人生涯の出來事は、吾人をして運命の源泉に接近せしむるものなること疑を容れず。就中、婦人と共に或る期待せられざる時季來りて、「明確なる豫覺」が、吾人を掠めて閃めく時に於いて殊に然りとなす。所謂明確なる豫覺とは何ぞ、それ即はち、吾人が知了せる生命とは、並行せざるものゝやうに見ゆる生命についての豫覺なり。婦人は吾人を導いて、人生の門戸に接近せしむ。意義深き短時間、假令ば男子の頭が婦人の胸に觸れたるが如き時に於いて、英雄は、その運星の力もあり、且つ確乎として動かすべからざる事を悟了せざらんや。また未だ曾て婦人の胸中に安息所を發見せざりし男子の心中に、未來に對する眞の情操の、起ることなしとせんや。

吾人は、また最高良心の惱み多き範疇にすら入ることをなす。嗚呼信なる哉、「所謂心理學なるものは、八百萬神

の尊像を安置し奉る爲めに、設けられたる靈境を横領する妖魔に均し。」と云ふとや。蓋し、心理學は、常に吾人に就いて考ふる表面のものにもあらず、また隱れたる思想を含む裏面のものにも非らざればなり。汝は戀愛のみ、ひとり能く、思想や、行爲や、言語やを知り、また靈魂は決してその牢獄の中より發生するものに非らざるを知ると想像せりや。予は今日、予と腕を捉りし婦人が、譎詐なるか將た誠實なるか、樂めるか將た悲めるか、眞面目なるか將た奸佞なるかを語るの要ありや。汝は吾等の卑しき言語は、吾人の靈魂が休息し、吾人の運命が沈默の中に充滿せる天上に達し得可しと考ふる乎。若し女にして、雨滴或は寶玉を說き、小鍼或は天翼を說かんとも、これ將た予に取りて何の憂ふるところぞ。若し女にして、理解せられん爲めに出で來ることなくとも、これ將た予に取りて何の患ふる所ぞ。汝は、予が崇嚴なる言語を渴仰する時は、則はち、或る靈魂が予の靈魂を凝視したるを感ずる時なりと考へざる乎。予はまた思想の最美なるものは、神秘の之を引合はす時に

も、尚ほ其の頭を擧げんとせざる事を知らざる乎。予は常に海濱に立ちつゝあり、而して、假令予にして、プラトンたり、パスカルたり、將たミケランゼロたらんとも、予の愛する女にして、只だ予に對して其の意中を語るのみならんとも、また言語は、予が語りしとするも、女が語りしとするも、そが底止も知れぬ心海の涙の上に漂ふ時には、唯だ是れ同一物として現はれんのみ。しかも吾人は皆な之を茲に諦觀せずして、他の中に諦觀せんと欲するなり。願はくば、予の此の高き思想を、生命

若しくば變愛の權衡もて秤量せしめよ、然らば則はち、屑々たる三語、即はち予の愛人が、或は銀の腕環と云ひ、或は眞珠の首輪と云ひ、或は硝子の裝飾品と云ふが如き囈の爲めに註られて、思想の重量を誤るが如きこと有らざらん。……

吾人は決して、智識の地平線上に登ること能はず。これ即ち、理解せざるものこそ吾人なれ、と云ふ所以なり。冀くば吾人をして、初雪降れる山巓に登らしめよ、然らば有らゆる不平均は、吾人の前に展開せられたる地平線の、

淨化力ある手によりて平均せられん。かくて、マアカス、アウレラス帝の演說と、寒氣を訴ふる兒童の言との間に、何等の差異かある。願はくば吾人をして下つて、偶然と必然とを區分せしめよ。願はくば、「漂へる杖」をして、吾人に取りては、淵の神怪を忘るゝの料とならざらしめよ。最も光榮ある思想及び、最も謗劣なる理想は　最早、天上若しくばヒマラヤ山、若しくは地球の表面を變化し得る程の絕壁に懸れる星辰の中に在りて、吾人の靈魂の永劫不朽なる表面を皺むること能はざる可し。瞥見や、接吻や、或る見えざる大事物の現存せることは既に說き盡されたり。次いで予は、予に據れる婦人は、予と均しきことを述べんと欲す。……

實に此の平等は、賞贊すべきものなれども、また怪しむべき事に屬す。戀の心の一たび婦人の胸中に起るや、彼も予も共に持つべからざる、卑しき肉慾の影の、彼の女の心中に宿ることありとも、その戀は尚ほ永劫不朽なり。故にその元始的本能を除きては、あらゆる婦人は、恐らく、吾人に拒まれたる不知てふものと交通するものならん。

次代の疆域に在る寶庫より、最善の男子を隔離する距離は大なり。而して、人生の崇嚴なる瞬間が、此の寶庫より寶玉を要求する時に當つては、男子は最早や自己を彼方に導く道程を記憶せずして、無益にも自己の知識が流行せしめたる虚僞の裝飾を、儼然として欺くべからざるの境遇に求む。然れども、婦人は決して、自己の中心に導く所の道程を忘るゝものに非ず。而して予の婦人を發見するや、有福の中、貧賤の中、無智の中、智識の充滿せる中、屈辱の中、光榮の中に於いてす。しかも、

予は、未だ墾かれざる予が靈魂の底より出で來りし一語を囁くのみなるべく、婦人は、その忘れざる神秘の徑路に就きて、幾度か自己の足を踏み返し、而して一轉瞬の躊躇もなく、予のと均しく純粋なる語話や、貌付や、身振やを、その無盡藏なる戀の庫より携へ來りて、之を予に送り返す可し。これ婦人の靈魂は、常に召されて中に在ればなり。蓋し、婦人は、晝となく夜となく、恒に他の靈魂より來る所の高き同情に報いんとて、準備をさ〳〵怠りなきものなればなり。而してその報酬は、卑し

き賤が女にも、將た止事なき王妃のにも、些の差別はあらざるなり。……

婦人は假令、卑しからんとも尊とからんとも、はた夢裡に搔き消されんとも、朧ろげならんとも、笑ひ續けんとも、または涙の谷に投げ入れられてあらんとも、吾人は敬意を表して、これに接近せざる可からず。何となれば、婦人は吾人の知らざる所を知り、吾人の失ひたるラムプを有するものなればなり。婦人の永遠の住み家は、不可避の足跡中に建てらる。而して最も巧みに造られし不可避の道路は、吾人に見ゆるよりも更に明らかに婦人には見ゆべきものなり。かくの如くにして、婦人の奇怪なる直覺は來れり、吾人が由つて以て逍遙ふ所の婦人の眞面目は來れり。而して吾人は、婦人の瑣細なる行動の中にすら、尙ほよく彼等が、强くして正しき神のみ手によりて支持せられたりと自覺せる事を感得し得可し。予は曩に、婦人は吾人をして、人生の門戸に接近せしむることを說けり。吾人にして彼れ等と居を同じくするや、吾人は確信せんと欲す、夫の元始的門戸は、疑もなく物の發生を待ちて、醉へ

るが如き囁きの中に開かれたり。然る後説話は、聞として沈默に歸せり、蓋し恐怖は、命令若しくは禁止が發布せらるゝまでは、決して聞き得らるべきものにあらざればなりと。……

然れども、婦人は決して此の門戸を潜る者にあらず、彼れ等は始めより、源泉の湛へらるゝ内部に在りて、吾人の到るを待ちつゝあるならん。吾人の一たび來りて、外よりこの門を敲くや、婦人は吾人の言に任せて、直にその戸を開くべしと雖も、尚ほ自らその鎖鑰を握りて敢て離すことをせざる可し。

婦人はまた霎時の間、自己に送られし男子を眺めん、而かもその短き瞬間に於いて、彼が知らざる可からざる總ての事を知り、來ん年もまた來ん年も競競として戰慄し、以てその最後の時に逮ぶものとす。……天下誰人かよく、戀の初姿（フロアストルツク）の何物より造られしかを語り得るものあらんや。戀や實に「魔術師の銀杖が、洩光の影より作り出したるもの」にしてその影や、吾人々間の永劫の家より照射せられ、兩個の靈魂を變形せしめて、之に若やかなる二十世紀の生命を賦與するものとす。門戸

は今や危險を冒すことなく、又た努力を費すことなくして、再三之を開閉し得可し。蓋し、一切は已に決せられたればなり。彼の女はよく知了せり。彼の女は今は早や、汝が爲し、汝が語り汝が考ふる事柄には關らはざる可し。若し彼の女にして注意するとありとせば、そは只だ微笑することゝ、最初の瞥見によつて生じたる確信を破壞すべき總ての物を、無意識的に抛棄せんとするとなる可し。汝、若し、われは能く彼の女を欺き得たり、彼の女の感想は誤れりと考ふる事あらんとも、そ

は謬なり、眞にはあらず。彼の女にして、たとひ、擧動、微笑、涕涙の意味を誤解するとありとするも、而かも尚彼の女の目に映じたる汝は、汝の靈魂に映じたる汝よりも、更に確實なる汝なることを知れ。……

名さへ持たずして隱れたる寶！……女の手によりて苦しめられ、女の缺點を發見したる人々にして、聲を厲しくして之を公言し、且つ批難の理由を說明し、その理由は吾人を驚かしむる程適切なりとするも、予は尚、神秘の道に沿うて、遠く〳〵前進せんと欲す。

何となれば婦人は實に、吾人が見ること能はざる覆面したる大事物の姉妹なればなり。婦人は實に、吾人を周匝して遍在し給ふ天帝の血屬に最も近きものなり、彼等は、小兒がその父に對するが如き親しみを以て、天帝に對してのみ微笑す。われ等の靈魂の淨香を保持する所の婦人は、猶ほ天より賜はりたるにも拘らず、誰一人その使用法を知らざる寶玉にも譬へつべきか。而して假令ひ旅立ちゆくとも、その精靈は長へて殘りて、ひとり淋しく荒野の原に彷徨はん。彼れ等の情緒は、創始時代に於ける神の情緒の如く、その身の源泉は吾れ等のよりも遙かに深く、すべて光華燁燿たる物の中に横はる。婦人に對して惡感を懷くものは、眞の接吻の發見せらるべき天上の事を知らざるものなり、吾人は寧ろ大に之を憐まざるを得ず。さはれ吾人にして路傍を通過して、婦人を觀察しなば、そは如何に無意義に見ゆるぞや。吾人は曾て小家屋の裡に働く婦人を見たり、甲は前に屈み、乙はその下に嗚咽し、丙は歌ひ、丁は裁縫しつゝありしが、其處には理解力ある吾人の如きものは、一

人とても有らざりき。……人の樂しき者を訪問するが如く、吾人は彼等を訪問したり。吾人は注意と、疑念とを挿みつゝ、彼れ等の許に達しぬ。されど吾人の靈魂の、其の裡に入らんことは殆んど不可能にてありたりき。吾人はさも信を措かざるものゝ如く、彼等に問ひぬ。彼等は已にその事を知り居たれども、何等の答も與へざりき。故に吾人は肩を聳やかしつゝ出で行き、彼等に理解力なきことを確かめたり。……「さはれ理解せん爲めに、彼れ等は何物をか必要とする。」常に正しき詩人は之に答へて曰ふらく、「多幸なる人々の人と成りを理解せん爲めに、彼れ等は何物をか必要とする。」この地球に於ける戀の淨火、萬物を照らす天火の記號が、み寺の塔の尖端より、搖げる船の檣頭より輝くが如く、燦爛として光輝を放つ人々の人と爲りを理解せん爲には、彼等は何物をか必要とする。不可思議なる自然の神秘は、神秘なる瞬間を以て、屢々愛する所の婦人に啓示せられたり。而して婦人は公明正大に、はた無意識的に、神秘に就いて公言せん。無邪氣と歡樂との中に、神秘が蒔

き散らしたる路上の寶玉を拾ひ上げんとて、あらゆる聖人は神秘の跡を追蹤せり。神秘の感得する所を感得する詩人は、神秘の愛に對して誠意を捧げ、且つその詩歌の中に於いて、或る時代或る世紀にとりては、黄金時代の萠芽たるべき戀愛を移植せんと試みたり。」吾人は主として婦人に呈せられたる神秘について、何事の云ひ傳へられたるかを知らず。然れども、婦人は、これ有りしが爲めに、世界中の神秘の觀念を、今日まで傳承したるものなるや明らけし。……

不見之善

一夕予は海岸に於いて聖者に會しぬ、夕ぐれの小波は音もなく寄せて岸を洗へり。聖者曰らく――不見之善(The invisible goodness)は、人これを看過し、吾人も亦た殆んど注意せざるものなり、然れども吾人は之を以て、人類を安固にする一勢力なりと考へんと欲す。千差萬樣なる方法を以て、神は吾人の中に自己の存在せることを顯はさんとす。然れども此の神秘なる善に至りては、未だ曾て明示せられたることなし。こは神の永刼なることを表示する純粹の徽號なり。吾人は知らず、何故に此の物の來るやを。不見之善は、その素樸中に存在し、吾人靈魂の入口に於いて微笑す。その微笑は人心の底深く横はり、又た屢々外面に閃めく、かゝる人は吾人をして日夜に苦しましむ。かゝる人と不見之善とは、吾人をして愛して已まざらしむる力を有せり……

不見之善は、素と此の世の問題に非らず、然れども吾人の問題に上るべきものにして、そが參加せざるものは、殆んど是れ有らざる可し。不見之善は樣子や、涕涙の中に自己の現はれざることを憂へず。否、一人の之を占ひ得る者あらざるが故に、寧ろ自己の隱されんことを要む。不見之善は、恰かも自己の力の利用せらるゝことを恐るゝものゝ若し。不見之善は能く知れり、故意ならぬ自己の運動は、自己を圍繞せる生命をして不朽ならしむるならんと、不幸にも人は此の不朽のものと共に在り。何故に吾人は、自己胸中の天國を衰微せしめんことを憂ひて、爾く恐怖

するか。吾人は敢て、吾人を勵ます所の神の囁に聽いて活動せざるなり。吾人は言語若しくば身振に由りて説明すべからざる一切の物を恐れ、説明するも何等の効果なき場所に於いて、自己の爲せし所のものを見ざらんと欲す。何故に神を臆する心は、吾人の胸中に起るか。これ蓋し、吾人靈魂の運動が神に近づけば近づく程、小心翼々として、自己の行爲を同胞の眼に入らしめざらんとするが爲なる可し。人間は驚かされたる神に外ならずとは、これ誤謬にあらざるなきか。優勢なる力に背叛すべからずとの命令は、吾人の頭上に下されたりや。病に惱める小娘は、客人の家に來ることありとも、その母は之を呼び迎へざらんと欲す、かゝる小娘の優しき心情は、目に見らるべき此の世界の一部を成さゞるものゝ上に措かる。かるが故に、不見之善は未だ吾人靈魂の沈默なる入口を通過せずして獄窓の下に近づくことを許されたる囚人の如く、吾人人類の中に生存す。然れども何物か之を通過して達せざるもの有らんや。不見之善の存在せることは確實なり、然れどもこは時として幽

閉さる。かゝる場合には、只だ不見之善をして、その頭を上げ、その鐵鎖の一環を動かし、或はその手を開かしめよ、然らば則ち、牢獄は燦然として輝き、光の壓力は内部より閃めきて堅牢なる鐵闥を排せん。此の時、淵は俄然として大口を開き、言と軀との間に待たん、淵には數多の天使群がり、この問題に就いて意見を述べん。かくて沈默は一切のものゝ上に落ち、その刹那を以て雙眼は轉ぜられ、兩個の靈魂は入口に於いて相抱きて涕泣しなん。……

不見之善は、此の地球より來るものに非らず、如何なる文章もよく之を叙述するなし。之を理解する程の人々は自己の中に同一なる感覺を有する者ならざる可からず。若し汝にして其の生命の中に、汝の不見之善の力を感ぜざらんには、願はくば遠く行くと勿れ、そは恐らく無用なるべし。然れども世には、事實此の力を感ぜざるもの有る乎、また吾人の中の最惡なる者は、陰かに善くはあらざる乎、予は知らず。此の世に於ける多數の人々に就いて觀察すれば、その目的は、神をして彼等の靈魂中に失望せしむるものゝ如し。

神は再び現出する爲めに、只だ一寸時の猶豫を要す、かの最惡なる者すらも、不斷の警戒を加へ居る譯にはあらざるなり。之に依つて之を觀れば、かの惡しき者の多數は陰かに善かりしが、使徒や聖者等は陰かに善からざる場合ありしこと、疑を容るべうもあらず。……

聖者は進んで曰へらく、予は屢々苦痛の原因となりしが、ひとり予のみならず、予を繞れる一切の事物は、皆な苦痛の原因なり。予は苦痛を惹起しぬ、これ盖し、吾人が此の世に在るを以てなり。此の世に在つては、一切の事物は、皆な見えざる絲によりて結束せられ、一事一物として孤立せるものはなし、戀や親切の優しき姿は、屢々吾人に據れる無邪氣を戕ふことあり。——

予はまた苦痛を惹き起しぬ、これ盖し、最善最柔なるものは、强ひて他の苦痛を自己に分たしめらるゝ時あればなり。此の世には一種の種子あり、此の種子は雨と降る涙の下、吾人の靈魂の中に萠芽し、善き花を開き、好き實を結ぶ。こは自作の定律にあらず。予は何故に人を泣かしめざりし人を愛せんと欲するかを知らず。絶大なる苦痛は、往々

にして絶大なる戀をなせる人々に因りて惹き起さる。盖し、怪しく、柔しく、臆病なる殘忍は、戀に取りては煩はしき姉妹たる場合多ければなり。あらゆる方面に於いて、戀はその證據を索む、その第一の證據は——誰れか之を戀人の涙の中に發見せざる者あらんや。死すらも充分には、無理なる戀の叫を聞かんとする戀人を信ずると能はず。盖し戀の姉妹たる殘忍に取りては、死の刹那は餘りに短かければなり。死の彼方には洞あり、疑の海を湛ゆ、かの情死する者の中にすら、尙ほ且つ疑念は漂ふものなり。潛々たる落涙はこゝに要求せらる。悲歎は、戀の最初の食物なり。小さく純き苦痛を餌として育てられざる戀は、大人の食料を以て育てらるゝ小兒の如く、遂には死せざる可からず。汝の口邊に微笑を泛べしむる婦人によりて、皷舞せらるゝ戀愛は、全く同一物なるべきか。戀には獸欲なからざる可からず、涕涙滂沱として流るゝ時に於いて、戀の鎖は永へに鍛冶せらる。……

聖者は語を續けて曰はく、予は戀せし故を以て苦しみたり、予は又た戀せ

ざりし故を以て苦しみたり――されど此の差は如何に甚だしかりしぞ。前の場合に在つては、潸々として垂るゝ戀の涙は、その底に於いて吾人の合一せる靈魂中に在る一切の物を潤したるが如くなりしも、後の場合に在つては、憐れなる涙は獨り淋しく荒原の中に落つるにも似たりき。靈魂――恐らく靈魂を擧つて皆注意するが如き瞬間に於いては、吾人は不見之善の偉大なることを認知す。不見之善は、戀せし初めの樂しき幻をして、戀の終の悲涙に終らしむ。かくて悲むべき夕べは來りて、汝の微笑せざる接吻の上に、慘憺たる愁雲の懸ること有るべしと雖ども、やがて其の謬れることを曉りて、汝の靈魂の覺醒する曙あらざらんや。汝の靈魂の俄然として起つて、説明すべからざる運動を作すや、汝の言語は非常なる艱苦を冒して、最后の別離の冷風中に響き渡らん。汝は永久に別れざる可からず。殆んど生命なき汝の手は、歸期さへ知られぬ旅立に澁みて、告別の辭を告げんが爲に伸ばされたり、此の瞬間を以て、汝に據れる靈魂は、覺醒の頂點に達し、或る物は發生して、

淫婦の戀よりも遙かに高き處に住す。肉躰は互に分れて罷むべしと雖も、靈魂は決して左の二事を忘れざる可し、曰はく、己れ等は刹那の間を以て、未だ曾て見ざりし山上に於いて、互に扶け合ひたり、曰はく、己れ等は第二の場所に於いて、その日まで知らざりし善を知りたりと。……

予が茲に戀と結合せしめて語る所の神秘的運動とは何ぞ、そは生涯の些細なる出來事の中にも起るべき乎。予はその犧牲たるか、或は心的結合たるかを知らず。神秘的運動は、靈魂をして靈魂たらしめんとの意味深き慾望にはあらざる乎、或はまた、目にこそ見えざれ、吾人のと均しき生命が存在せりとの自覺にはあらざる乎。神秘的運動は生涯の行爲中、驚くべく悲しむべきものにして、その起りし瞬間に、吾人の中に充滿するものには非らざる乎――別言すれば、そは一にして分つ可からざる生活の狀態には非らざるなきか。予は之を知らず、然れども吾人が何處にか、知られざる勢力の存在せることを感じ得るは事實なり。吾人はまた感ずらく、吾人は一切を愛し給ふ、知ら

れざる神の寶物なり、此の神の姿は感知せずして過る能はず、かくて、吾人は遂に、自己を賣らざる物の境界に入ると。……

吾人は生れでより死するに至る迄、決して此の明白なる地球より發生したるものに非らず、吾人は賴りなき覺醒者の如く、殆んど絶望して自己を容るべき廟を求むる勇氣なき盲目の如く、蹌踉として神の中に彷徨する者なり。吾人は生命の中に住す、人は人に抗し、靈は靈に抗し、儼乎たる武裝の下に日夜は過ごさる。吾人は決して互に相逢ひ互に相觸れず。吾人は楯と冑の外何物をも見ず、鐵と眞鍮との外何物にも觸れず。然れども、錫の如き狀態をして素樸なる空より來り、一刹那の間に於いて有らゆる武器を滅却せしめよ。涙は常に冑の下に溢れ、小兒の如き笑は楯の後に含まれざらんや。

聖者は霎時の間考へしが、良々ありて進み出で、最と悲しげに說きて曰はく、一婦人——予は信ずるまゝに今しも汝に語りたり、——一婦人の爲めに、予は意志の力に反抗して酷く苦しみぬ——蓋し吾人の中最も注意深き者は、

知力を賴まずして、己れ等の周圍に苦痛を撒布せり——一婦人の爲めに、予は意志の力に反抗していたく苦しみぬ。その婦人は一夕予に對して、崇高なる不見之善の威力を見したり。善者とならん爲めには、吾人は苦しまざる可からず。吾人は最善者となる前には、必然苦痛を經過せざるべからず。その夕べ、予はよく之を理解したり。……戀は人の之を了解するや、發生の原因知れざる病に罹りて死する小兒の如く、吾人の間に死せんとす。吾人は最早何事も云はざる可し、蓋し此の眞面目なる瞬間に起りし思想を呼返すは、予に取りては不可能なるとなればなり。予の思想は疑もなく無意義なりき、恐らく予は曾て見しことある顏面について考へ、また或る荒凉たる街角に於いて閃めきたる提灯の火影について考へたりき。そは朧ろげなりしに拘はらず、予の思想、感情中に起る愛憐の勢力よりも、更に明らかに、更に高やかに、光の前に一切の事物は現はれぬ。かくて吾等は分れしが、一語をも交ゆることなかりき。然れども此の一瞬間に、吾人はその表現すべからざる思想を了解

することを得たり。今や予はよく知れり、他の戀即ち、言語や、注意や、尋常一様の戀の微笑やを要せざる戀が、躍如として發生したることを。吾等は再び逢はざるべし。吾等が再び逢ふべき前に、世紀は恐らく一轉するならん。

「多く學べば、多く忘る、
吾はしも永く世界を遍歷せん。」

その世界を遍歷する、須からく此夕と同一なる靈魂の運動中に、再び自己の在ることを發見する前たる可し。されども吾人は、よく忍んで待つを得可し。

その日以來、予は各所に於いて、甚だしきに到りては最も苦痛なる瞬間に於いてすら、此の怪力の存在せることを認めぬ。一たび此の力を確認したる者は、再びその顏を忘るゝこと能はざる可し。汝も亦た屢々、嫌惡の隱れ家の中、殘忍なる涙の底に、之を見たることあるならん。而かも此の怪力は、尙ほ未だ肉眼には映ぜざる可し。此の怪力にして、一たび外面發動の手段を取りて、自己を顯現することあらんか、その本性は、その瞬間よりして變化せん。吾人は最早靈魂に從うて、眞理の

中に住するものに非らず、吾人は今や人の見透かし得るが如き虛僞の中に住せんとしつゝあり。善も戀も自覺たり、蓋しこれ等のものは、各々その住家を有すればなり。然れども、善や、戀や、時には盲目となりて、宿命そのものを柔らぐること有り。予は一の靈魂にすら觸れたる事なくして、親切なる行爲、若しくは慈善の行爲をなす人々を知れり。予はまた虛僞と不義との中に生活しながら、靈魂未だその身を去らず、また誰一人之を以て不正なりと信ずる者なき人々をも知れり。啻にこれに止まらず、汝を知らずして、汝の情事や善行やに關して喋々する人々をも知れり。——若し汝にして、不見之善に從ひて、善からざることあらば、これ等のものは恐らく或る事の缺けたるを感ずるなるべく、またその深底に觸るゝこと能はざる可し。人誰れか信じ得ざらんや、何れにか處あつて、一切の事物が、漂へる精靈中に秤量せらるゝことを。又誰れか信じ得ざらんや、何れにか確信の貯水池あつて、朝な〳〵沈默なる靈魂の群が己れの渴を醫せん爲めに、其處に群集することを。

吾人は恐らく、「愛す」との語は、如何なる意義を有するかを知らざる可し。愛は吾人の中に在り、自己の中にて、吾人は無意識に愛するなり。愛すとは、憐みを持つの義なり、心的犧牲の義なり、扶助せんとして心配し、幸福を與へんとするの義なり。愛は千仞の深底に在り、溫柔、快速、奇怪なる吾人の言語も、此處には達すること能はざるべし。或る瞬間に於いては、吾人は之を目するに、大なる元始的統一の紀念物を以てし、そは隱密なれども頗ぶる鋭敏なるものと信ずることを得可し。

愛の中には力あり、何物も之を防ぐこと能はず。吾人の中、誰れかよく、此の愛の力の神怪なる活動の紀念物として、自己の存在せることを認め得るものぞ。吾人の中誰れかよく、尋常一樣なる人の側に在りて、突然何者も呼び出し得ざる物の現はれしことを自覺し得るものぞ。愛の力は靈魂にはあらざる乎、生命にはあらざる乎。そは覺めんとする睡眠者の如く、自ら轉輾することあらざる乎。予は知らず、人も亦た語ること能はざる可し。然れども、汝が他と接して離れざること、恰かも

何事も起らざるに均しかるべし。

愛すとは、靈魂に從うて愛する事なり。天下豈に愛に應ぜざるの靈魂あらんや。蓋し、人の靈魂なるものは、近世紀を捨て去りし客人にして、そは再び結婚の宴に招かるべき者にあらざればなり。

吾人同胞の靈魂は、吾人の周圍を彷徨して、鍾愛せられんことを懇望し、記號の與へらるべきことを期待す。さはれ靈魂が、敢て、かゝる記號を造らんとせざりしことの、何ぞ夫れ久しきや。吾人の生涯は險嶮を以て閔凶に遭へり、吾人は今や靈魂を離れて生活し、僅かにその輕微なる運動中に立つ。然れども吾人若し靈魂をして、その默する處、その輝く處に笑はしむることを許さば、これ即はち、吾人が既に永久の生命を得たることを見すものなり。唯だ一事、吾人の考へざるべからざること有り。吾人が靈魂の鎖を打破せん時――靈魂はかの發狂者の如く、常に鎖を以て縛せらるゝの習慣あり――靈魂はその尊き瞬間を利用して、何事を爲さんとするか。一例せば、吾人が靈魂に、永劫なる生命の殿堂に入ることを許せし

が如き場合に在りては、靈魂は愛の中に何事をか爲す可き。人々若し、吾等は各自互に面接す、これ猶ほ婦人が愛する男子に對して感ずる所と均しかるべしと云はゞ、靈魂は恐らく、元始的眞理に從ふことを肯んぜざるべきか、

神の如き不見之善に就いては、予は之を語ること能はず、然れども只だその存在の理由を語ることを得可し。こは實に吾人靈魂の不斷の活動を現はすには、最も確實にして、最も卑近なる記號なり。此の神の如き不見之善は、その一定したる方法を以て、自己の無意識に觸るゝ所のものを貴くす。願はくば友の爲めに哭する者をして、自ら下りて、何故に友の存生中に善くせざりしかを顧慮せしめよ。予自身に關して云へば、予は他人の傍に在りながら、予をして自己の不見之善を感ぜしめ、またその一刹那を以て予よりも善者となり得ざるが如き人とは、會見すること無かる可し。汝只だ心底に於いて善なれ、然らば汝は發見するならん、汝の周圍に在る所の人々は、汝と均しく皆な善良なることを。最も確實に善の神秘的絶叫に應ふるものは、善の神秘的絶

叫に近きものなり。汝若し隱約の中に努めて善をなすと有らば、汝に接近する人々は、總て、他人の前にては爲し難き事を、無意識的に汝の前にて爲さん。

此間に無名の力は横る。精神的競爭は、曾て障礙を知らず。そは恰かも活動的地點、即はち、吾人靈魂の感覺ある箇所に均しかる可し。蓋し靈魂には自己の存在を忘れたるが如きものあり、また昇天を扶成せんとする一切の事物を拒絶せんとするものあり。然れども一たび相觸るれば、互に自己を陞らしめんとす。かの漠々たる不見之善の中原に立ちては、最も賤しき靈魂すらも、決して敗北に甘んずること能はざるなり。

吾人の生命には何等の變化なし、そは只だ生命と關係あるものたるに過ぎず。吾人の生存は公道の石の如く、吾人の手の爲し得可き行爲に限られたるに非る乎。若し汝にして、吾人が毎夕自問する如く、「予は今日、如何なる不朽の事業を爲せしや。」と自問しなばそは常に吾人が正確に計算し、秤量し得る物質的方面の事に限られたる概なき

乎。世には汝が模索を開始せざる可からざるものありや。汝はよく溢るゝ許りの涙を流し得べし、確信を以て胸を充たすことを得可し、靈魂に對して永劫の生命を支ふる事を得可し。去かも人は之を知らざるべく、汝自身も亦た恐らく之を知らざる可し。何物も變化なしとは、必ずしも解し難きことにはあらず。靈魂若し坩堝に容れられなば、一切は粉碎せん。吾人の所謂善は、最小なる恐怖にも敗るべし。然れども靈魂の關する所に非らず。或る事は神によりて起されたり、吾人の神は或る處に微笑せざるべからず。吾人の中に存在する所の不可說的事物を活躍せしむること、これ即はち生活の最高目的には非ざる乎。四隅に眠れる「不可解」を覺まさしめし時、吾人は如何程自己を利したりや。汝は再び眠ることなき「覺めたる戀」を有せりや。汝の靈魂の關知せる靈魂にして、汝と共に他人は知らざる歡喜の涙を灑ぐものあらば、そは汝をして憤怨せしむることなく、又た苦痛の中にすら投げ入るゝこと無からん。靈魂は「許し」の必要をすら感ぜざる可し。內に湛へられたる微笑を塗抹

し。滅殺するものはあらざる可き乎、人は之を知らずと雖ども、そは確かに論證せらるべきことなり。蓋し宇宙廣しと雖も、一刹那に向つては、「共に善かりし」兩個の靈魂を離し得たるものとては、未だ曾て、一つだも有らざるなり。

神秘論 終

SLEEPLESS DREAMS

Girt in dark growths, yet glimmering with one star,
  O night desirous as the nights of youth!
  Why should my heart within thy spell, forsooth,
Now best, as the bride's finger-pulses are
Quickened within the girdling golden hair?
  What wings are these that fan my pillow smooth?
  And why does Sleep, waved back by Joy and Ruth,
Tread softly round and gaze at me from far?

Nay, night deep-leaved! And would Love feign in thee
  Some shadowy palpitating grove that bears
  Rest for man's eyes and music for his ears?
O lonely night! art thou not known to me,
A thicket hung with masks of mockery
  And watered with the masteful warmth of tears?

——*D. G. Rossetti.*

明治三十九年四月十日印刷
明治三十九年五月五日發行

定價金三十錢

著者　西村眞次

東京市神田區表神保町二番地
發行者　福岡新三

東京市淺草區下平右衛門町九番地
發行者　岡村庄兵衛

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地
印刷者　石川金太郎

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地
株式會社
印刷所　秀英舍

不許複製

（クンリルテイメ論秘神）

發賣所

東京
修學堂　大林屋　前川平　東京堂　上海文榮閣　田京堂屋

京都
山中勘次郎　名倉照文館　中川書店　杉本策書堂　得勘助　至誠堂　淺見林堂

函館
小島大盛堂　久留米菊竹書店　鹿児島吉田幸兵衛　熊本市長崎次郎　名古屋星野文星堂　梶田勘助　川瀬代助

發行所

東京市淺草區下平右衛門町九番地
岡村書店

東京神田區表神保町
福岡書店

東京神田區表神保町
自祐社

近刊

坪内逍遙先生序　高須梅溪先生著
太田三郎先生裝畫　附　三十文士の評

我が散文詩

五月中旬發行

印刷中正價未定、紙數凡四百頁

坪内博士本書を閲せられて曰く

（前畧）成程これならば『我が散文詩』と銘を打たれ候も、一理屈あることゝ存じ先日の異論は取消しにいたし候、如何にも行屆いたる筆のはたらき、かたの如く評すれば、流麗暢達、萬斛の清泉地を擇ばすして涌き出づるが如しともいふべく少しく手細工に揑ち申さば、椿一輪落ちて池の面に波紋おのづから廣がり、秋江の月冴へて白帆銀裾を牽いて走るなど申すべくや、言葉は繁けれども人をして倦ましめず、花は多けれども、いやしみのないところ最も嬉しく候（下略）

33
470

007926-000-6

33-470

神秘論

メイテルリンク/著

M39

AAA-0097